金の閃光のもう一人の義兄Another外伝：Avenger story.

珀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
金の閃光のもう一人の義兄Ａｎｏｔｈｅｒ外伝：Ａｖｅｎｇｅｒｓｔｏｒｙ.

【Ｎコード】
Ｎ１８９２Ｘ

【作者名】
珀狼

【あらすじ】
８年前のあの日・・僕の故郷の街はある強盗団に焼かれ…みんなを破壊された
そして僕以外を残して父さんや母さんやみんな死んじゃった
「父さん・・母さん・・お姉ちゃん・・」
お姉ちゃん、みんな…僕決めたよ

必ずあの強盗団供を１つ残らず僕が斬り捨てるから

「待っててね・・父さん・・母さん・・お姉ちゃん、僕頑張るからね・・だから」

そして見ていてね、お姉ちゃん、父さん、母さん、みんな・・・。
僕、必ずやり遂げるからね…奴等への”復讐”を…！

ある日、同じ部隊の仲の良い同僚シグナムに新たに新設される部隊”機動六課”に誘われたヴェナージ
…彼が加わる事で変わる機動六課の運命とは？

毎週土曜日の亀更新です！！

※主人公がチートではありませんがそれなりに強く、原作改変もそれなりにあります。それが嫌という方は回れ右をして下さい
※この話は台本形式ではありません

駄文だと思いますが見ていただけると嬉しいです

ヴェナージの設定

ヴェナージ・モルドレイド　　男

１７歳

身長：１６２？

髪色：ダークグレイ　　瞳：アクアブルー

顔つき：カッコイイ系（シャーリー談）

六課に来る前はシグナムと同じ航空武装隊第１０３９部隊所属の空戦魔導師

魔法術式は近代ベルカ式でランクはＳ＋　で２等空尉

魔力光はスカーレット　魔力変換資質：炎熱＋電気

ある異世界の出身のヴェナージは、８年前故郷の街を強盗団に襲われる

襲撃の際にヴェナージも強盗に襲われるが姉がヴェナージを庇った

為にヴェナージは何とか一命を取り留める事が出来た

だが・・姉と両親は、強盗団に斬殺された上、彼の友人達も含めヴェナージ１人を残して街の住人全員皆殺しされたヴェナージは強盗団への復讐を誓った

ヴェナージは助けられた後、検査の過程で魔力量が高い事が判明

そんなヴェナージに、管理局は訓練学校入りの話を持ちかける

身寄りの無いヴェナージは訓練学校の話を受ける事にした

訓練学校に入学したヴェナージは、なのはやフェイトと同じく３ヶ

月の速成コースを主席で卒業した後、復讐の為にヴェナージは管理局に入局した
入局後、実戦の中でヴェナージは復讐心を糧にその才能を一気に開花させていく
そして遂には、ある二つ名を得るまでに成長
その後、第１０３９部隊に転属した
第１０３９部隊に転属後、同じ剣を扱う者してシグナムに目を付けられてしまう
その後、会う度に模擬戦を挑まれいく内に仲良くなりシグナムに六課に誘われる

デバイス

ガラドスレイヴ　通称：スレイヴ

ヴェナージ専用：剣型デバイス　　カートリッジシステム搭載型

ヴェナージが独自に制作した特殊なデバイス。
分類上は、アームドデバイスなので語源はドイツ語の筈なのだが…
スレイヴの語源は何故だか英語、制作者のヴェナージはその理由をフレームや武装の部分に金を使い過ぎて語源やその他の部分は安く出回ってるミッド式の物を採用したとの事
起動後の剣型の基本形態の刀身は輝きを放つ程の美しい黄金色が特徴的
大きさはシグナムのＬＴと同じ位だがスレイヴは両刃
刀身の黄金は本物の純金が素材の１部に使われている
これはヴェナージの技「雷神一閃」の電撃の流れを良くする為の物

らしい

待機状態は金色の剣型のイヤリング

カートリッジシステムは・・以前、シグナムがＬＴの改良の際に出た古いＣＳのパーツをシグナムからヴェナージが譲り受けそれをヴェナージがスレイヴ用に改良し搭載した

その為、装填シークエンス等も全く同じとなっている

因みにＬＴのＣＳパーツを使っているのでシグナムのカートリッジの使い回しが可能

ＢＪは白／青がメインの色

意外にも、ヴェナージのＢＪは高町なのはのＢＪ「アグレッサーモード」が元になっている

元になっているだけに彼女のＢＪと共通点も多々ある

４１「ヨイチ」

銃型のストレージデバイス

外層はかなり拳銃的な外観をしておりティアナのアンカーガンよりもよほど銃らしい

しかし中身はアンカーガンと大差無い、というよりも術式や外装以外は同型

防御用や迎撃射撃の装備で銃口はアンカーガンと同じく上下２連装式

４１はマガジン式カートリッジシステムを採用している

マガジン１つにつきカートリッジは６発装填可能

またアンカーガンと同じくワイヤー付きアンカーを射出することが

出来る

ダブルヴァーカスエッジ

ヴェナージの左右のサイドスカート上部に装備されている武装
円筒形状で片手に持てる程度のサイズ
円錐状の刃の部分は自身の魔力をエネルギーに使用して実体化
それを高密度で固定し魔力刃サーベルとして使用する
刀身は魔力刃で出来ているので誘導弾等、魔力で形成された弾を切り払う事が可能

ヴェナージの設定（後書き）

今回の作品は台本形式ではありません
なので、戸惑うかもしれませんが宜しくお願いします　　珀狼

ＰＳ．第１話は９時頃には投稿出来ると思います

キャラ設定（六課）

高町なのは（１９才）

六課の新人の教導官
単独戦闘が可能な優秀な砲撃魔導師
ヴェナージの天敵、もとい苦手としている女性
その理由はヴェナージ曰く…人の心に何時の間にか勝手に居るタイプの人間で目標の妨げになる可能性が大きいからとの事だが、他にも理由がありそうだ

しかし彼女自身はヴェナージとは仲良くしたいらしくその事を猛烈にアピールしている

フェイト・Ｔ・ハラオウン（１９）

執務官であり六課のライトニングの隊長
高速移動からの斬撃による一撃離脱を得意とし、射撃・広範囲魔法も優れた万能型の魔導師
ヴェナージの苦手な女性？２
とはいってもなのは程に猛烈なアピールをしないのでそこまで苦手という訳ではない
普通に接している苦手な理由は死んだ姉とダブって見える事があった為だが、フェイトの容姿はヴェナージの姉とは違い似てるのは雰囲気
最近、ヴェナージの事が気になっている様子

シグナム　外見年齢は１９歳

ヴォルケンリッターのリーダー格「烈火の将」という二つ名がある
ライトニング分隊副隊長の１人
近接主体だが割と手数で勝負するタイプ
魔力変換資質「炎熱」を保有その為か魔法や斬撃には炎をともなうものが多い
六課でヴェナージの過去を知ってる数少ない人物の１人
ヴェナージに好意を持ってるのだが自分の気持ちに気付けていない模様

八神はやて（１９）

六課の部隊長
守護騎士ヴォルケンリッターを率いる魔導騎士
魔導師としては遠距離攻撃、遠隔発生、広域攻撃を得意とし圧倒的な能力を持っている

ヴィータ

ヴォルケンリッターの内の一人で「鉄槌の騎士」
役職はスターズ分隊副隊長兼戦闘教官

シャマル

ヴォルケンリッターの内の一人で「湖の騎士」
役職は主任医務官

ザフィーラ

ヴォルケンリッターの内の一人で「盾の守護獣」

リインフォースＩＩ

役職は部隊長補佐／副隊長補佐／前線管制
はやての人格型ユニゾンデバイス

スバル・ナカジマ（１５）

役職はスターズ分隊フロントアタッカー

ティアナ・ランスター（１６）

役職はスターズ分隊センターガード

エリオ・モンディアル（１０）

役職はライトニング分隊ガードウイング
フェイトの保護児童の一人

キャロ・ル・ルシエ（１０）

役職はライトニング分隊フルバック
フェイトの保護児童の一人

ヴァイス・グランセニック

役職はヘリパイロット
六課でヴェナージの過去を知ってる数少ない人物の１人
男同士気が合うのかよく話してる様子が目撃されている

シャリオ・フィニーノ

役職は通信主任兼メカニック
愛称「シャーリー」
ヴェナージと一緒に、デバイスの作成等を手がけておりその関係の
所為でヴェナージとよく話をしている為に六課内の女性局員では仲
は非常に良い

キャラ設定（六課）（後書き）

変化があると更新します　　珀狼

story. 1

・機動六課：部隊長室

機動六課の部隊長”八神はやて”は苛立っていた
その理由は・・・

「…遅い、幾らなんでも遅すぎやろッ！？この隊員」

「も、申し訳ありません《いや、シグナムが謝らんでもええよ》は、はぁ…」

新しく来る隊員が予定した時間を大幅に遅れているのだ
その事に怒るはやて、それに対して隊員をスカウトした機動六課のライトニング分隊の副隊長である”シグナム”がはやてに謝る
シグナムが謝った事ではやては一先ず怒りを抑える事にした
その後に・・・

「にしてもマジで遅過ぎるだろう」

「本当だね」

「何かあったのかな？」

スターズ分隊副隊長のヴィータそしてスターズ分隊隊長の”高町なのは”とライトニング分隊隊長のフェイト・T・ハラオウンも遅れている隊員の事を心配する

部隊長室に居るメンバーそれぞれの思いで隊員を待ってる中・・・
＊＊＊

僕は口ではそう言いつつも少し強盗団(クズ)の情報があるかもと期待をし煙草を消した
さて、そろそろ面倒くさい式とかも終わった頃だろうから行くとしますか…機動六課へ
……
「場所は確か・・・」

隊員は場所を確認した後バイクに跨りエンジンを掛ける
そして機動六課に向かって行った
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
???Ｓｉｄｅ.

・機動六課：ロビー

更に1時間後、僕はようやく機動六課に到着した
そして受付嬢を探していると・・・

「どうかしたんですかぁ？」

妖精？の様な人形？ともかく小人が現れた！
僕の中でコマンドが浮かぶ1、戦う　2、捕まえ…イヤイヤ・・きっとこれは幻覚だ！
疲れてるんだな～僕って……

「さっきから黙ってますけど大丈夫ですか～？」

……現実(ホンモノ)だった
僕は、恐る恐る小人に話しかける

「だ、大丈夫です。そ、それよりも爆乳・・こちらに所属しているシグナム2尉を呼んでいただけますか？」

「それは構わないですけど、失礼ですがお名前を聞いても良いですか？」

小人が僕の名前を聞いてきた

まぁ、当然の事だな

「”ヴェナージ・モルドレイド”2等空尉です。それとついでに彼女への伝言も良いですか？《はい♪構いませんよ》それでは……」

僕は小人にある伝言を頼む

さて…あの爆乳（シグナム）女はどんな反応をするかな楽しみだ

「それでは呼んで来ますので此処で待っててくださいね」

「分かりました」

小人が爆乳（シグナム）女を呼びに行った

それから5分も経たない内に爆乳（シグナム）女が僕が居る通路の奥に姿を見せる

そしてスタスタと早歩きで僕に接近し・・・

「誰が！愛しのシグナムちゃ～ん♪だ！！《ふごっ！？》／／／／／」

・・・何時の間にか起動したＬＴの峰で思いっきり叩かれた！しかも結構、痛い・・。

痛みに耐えながら僕はシグナムに話しかける

「〜っ！何だよ〜！僕とシグナムの仲だろう？《どんな仲だッ！／／／》一晩、同じベッドで一緒に寝た仲《うわあああ！／／／》ふごぁ！」

「なっ、何を言うんだ！貴様はッ！／／／／」

爆乳女（シグナム）は再び僕の頭をＬＴで叩き叩かれた僕は伏せながら倒れる
僕は別に嘘を言った訳じゃあ無いのに・・・過去に僕とシグナムは一緒の出張任務の時ホテルの部屋が１部屋しかとれずに一緒の部屋のベッドで寝た事がある
因みに、命が惜しいので変な事はしていない

「いって〜な！《自業自得だ／／／》ヘイヘ・・・・」

うつ伏せに倒れた僕は起きあがる為に身体を回す
すると偶然、僕の視界にシグナムのスカートの中が見える
因みに、色は・・・・

「ふむ・・《ど、どうした？／／／》今日は黒か《っ！／／／》」

「天誅ッ！！／／／」

シグナムの怒り咆哮の後、僕の意識は闇に落ちた
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
・機動六課：部隊長室

シグナムの天誅を喰らい意識を失ったヴェナージをシグナムは、そのまま部隊長室に襟裏を掴み引き摺りながらヴェナージを運んで行った

「新任の隊員を連れてきました」
シグナムが何食わぬ顔でそう言う
部隊長室に居るメンバーはシグナム以外の人が立って居ない事に疑問を持ったが・・それは直ぐに解消された
「ひょっとして手に持って引き摺ってるソレなんか？《はい、主はやて》」
「ど、どうしたの？《安心しろ、なのは。罰を受けただけだ》え？」
部隊長室に居るメンバーが揃って引き摺られてる人物に注目する
シグナムは皆の視線に気付き・・・
「起きろッ！《うっ！》ヴェナージ、皆に挨拶しろ」
・・・ヴェナージ文字通りに叩き起こす
シグナムの鉄拳を喰らい痛みで目が覚める
「ハイハイ・・只今、シグナム2尉から紹介されたヴェナージ・モルドレイド2等空尉ですどうぞ、よろしくお願いします」
敬礼するヴェナージだが表情からは面倒くさいという雰囲気が滲み出ている
そんな、ヴェナージに部隊長のはやては自己紹介しつつ遅刻の理由を尋ねる
「わ、私が部隊長の八神はやてです。早速やけど・・どうして遅

刻したんや？」

「・・寝坊した時に、どうせ遅れるなら面倒くさい式とかも終わった頃に行こうと思いましてコンビニで立ち読みしてたら何時の間にかこんな時間になってました」

「・・要するに寝坊なんやな？《はい♪》はぁ～・・・・」

ヴェナージの遅れてきた理由に頭を抱えるはやて

そんな、はやての様子を見てヴィータ達は・・

「だ、大丈夫かよコイツ・・」

「た、多分大丈夫だよ！ヴィータちゃん・・多分」

「そ、そうだよヴィータ・・・多分だけど」

・・苦笑いしつつヴェナージの事を見るのだった

すると、ヴェナージは、はやてに役職を聞く

「八神部隊長、自分の役職は何でしょうか？」

「ヴェナージ君はシグナムと同じくライトニング分隊の2人目の副隊長をお願いしようかな…？《何で疑問形なんですか・・・》いや～アハハ・・・。」

ヴェナージはこうしてライトニング分隊の副隊長に任命された…？

その後ヴェナージは、はやてにある質問をする

「八神部隊長《何や？》”ヴォラクシア”って知ってます？」

「ヴォラクシア？いや、知らんな～」

「執務官殿は？《私も知らないよ》そうですか…」

「それがどうかしたん？《いえ、別に》？　なら、今日からよろしくな！ヴェナージ君♪」

「…こちらこそよろしくお願いします」

その後、他の隊長達と挨拶などを交わし六課での初日を終えた

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その夜・・・。

Ｓｉｄｅ．ヴェナージ

・機動六課：ヴェナージの自室

僕は自室で今日の事を思い返す

「…エリート執務官やキャリア捜査官も意外と役に立たないな…」

フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官に八神はやて・・・期待はずれだったな

条件の中に僕を自由に行動させるを入れて正解だったな・・でないと強盗団供の情報が集められないからな・・幸いこの六課には”お人よし”が多いから色々と動きやすい

その点に関しては、評価すべき点かな？ふふっ・・・。

「さて・・明日から色々と忙しくなりそうだ・・フフフフ」

僕の微笑が室内に響くのだった・・・・・・・。

ｓｔｏｒｙ．１（後書き）

桃子「始まったわね”Ａｖｅｎｇｅｒ．”」

珀狼「・・・どうして此処に居るんですか？作品違いますよ？」

桃子「私の勝手でしょ？」

珀狼「・・・もう、いいです（ ´ Д｀ ）＝３」

桃子「今回のヒロインは決まったの？」

珀狼「今のところは未発表《決まって無いのね》・・はい、なので」

フェイト

シグナム

なのは

珀狼「この３人から選びます。”金の閃光のもう一人の義兄”でも聞きましたが同表だったので・・改めて３人中でお勧めの人が居れば教えてくれると嬉しいです（＾＾）」

桃子「まぁ、頑張りなさい《はい》それじゃあ・・今回はこれで」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

story. 2

翌日ヴェナージは自分のデスクで事務の仕事をしていた
するとそこに、なのはが2人組の女の子を連れてやって来た

「ヴェナージ君、ちょっといいかな？」

ヴェナージは、なのはに声を掛けられてキーボードを叩く手を止める
そしてヴェナージは声を掛けられた方向に振り向き対応する

「何ですか？高町教導官」

「もう、なんはさんでいいよ。みんなそう言ってるし」

「で、何ですか？高町教導官」

「にゃははは・・・。そうだヴェナージ君に紹介してないフォアードの2人を紹介しようと思って連れて来たんだけど・・いいかな？《どうぞ》じゃあ・・2人供、自己紹介しよっか」

なのはが2人にそういうと、なのはの後ろに居た2人が前に出てくる
2人は前に出てくると自己紹介を始める

「スバル・ナカジマ2等陸士です」

「同じくティアナ・ランスター2等陸士であります」

「「宜しくお願いしますッ！！」」

「ヴェナージ・モルドレイド2等空尉だ、まぁよろしく頼む」

ヴェナージは素っ気ない挨拶をすると再びデスクに振り向きキーボードを叩く

そんなヴェナージに対してなのはは・・

「えっと・・ヴェナージ君は他に何か無いのかな？《何がです？》ほ、ほら！自己紹介とかあるじゃない？《彼女達にしてどうなるんですか？》どうなるって・・」

そういうなのはに対してヴェナージはキーボード叩きながら説明を始める

「僕は、確かに立場上はライトニング分隊副隊長ですが、仕事以外の時間、僕はある犯罪者を調べるので忙しいので・・同じライトニングの隊員でも仕事以外の時間は絡む時事があるかどうか微妙ですよ？それに比べたらスターズ分隊は、話すかどうかさえ怪しいものですよ？なら、この程度で十分でしょう？・・さてと」

「何処行くの？」

「調べものです」

ヴェナージは席を立って何処かに行ってしまった

そんなヴェナージの様子をなのは達は黙って見送るしか無かった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ｓｉｄｅ．ヴェナージ

・機動六課内：廊下

事務仕事を終えた僕は廊下に出る
そして先程高町教導官達が自己紹介をした事を思い出していた

「スバル・ナカジマね・・・」

確か陸の部隊長に同じナカジマの性が居たような気がする
だが、僕には関係ないな

「次に・・ティアナ・ランスター」

彼女はどこか僕に似てる雰囲気を持ってるし気になるな
しかし・・ランスター・・ランスター・・聞き覚えのある名だな後で調べてみるか
そして僕は自分で顔を険しくしながら最後の人物を思い出す

「高町・・なのは・・か」

噂には聞いていたが相当なお人好しの様だ
あれは人の心に何時の間にか勝手に居るタイプの人間は復讐の妨げになる可能性が大きい・・出来るなら遠ざけるべきだ
優しく全てを包むような笑顔・・今の僕には正直キツすぎる距離を置いて正解だな
そう思いながら僕は六課を後にし情報を集めに向かった

Ｓｉｄｅ．ヴェナージ

・機動六課内：廊下

調べ物が終わって六課に帰ってきた僕は、今日の書類を渡す為に執

務官殿の部屋に向かっていた
…にしても強盗(クズ)団の情報が少なすぎる

「奴らが賢いのか・・・ただ単にマイナーなのか・・それとも・・・」

管理(なか)局に奴らの関係者が居て情報操作をしているか・・だな
まぁ・・いずれはその尻尾を掴んで…必ず斬り刻んでやる・・そう・・必ず

「おっと・・此処だったな」

考えてる内に僕は何時の間にか執務官殿の部屋に着いた
そして僕は数回叩きノックをする

「はい、どうぞ」

「・・失礼します」

すると中から彼女の声がし僕は部屋に入っていった
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課内：フェイトの執務室

自分の執務室で仕事をするフェイト
そこにヴェナージが種類を数枚程持ってやって来た

「どうしたの？ヴェナージ」

「・・執務官殿。今日の分の書類です」

「あ、うん　分かった直ぐにチェックするね」

ヴェナージがフェイトに書類を提出する
フェイトはヴェナージから書類を受け取るとチェックを始めた
数分後、チェックが終わってフェイトがヴェナージの方へ向く

「書類、全てチェック終わったよ何処も問題無しだよ。お疲れ様」

「では、失礼します」

「あっ、ちょっと待って《どうしました？執務官殿》あ、あのね・・《はい》同じ部隊の仲間なんだし執務官殿のじゃなくて・・名前を呼んでくれないかな？」

フェイトは部屋を出ようとしたヴェナージを呼び止めた
そしてヴェナージにフェイトは自分の名前を呼んでとお願いしてみる
ヴェナージの返答は・・・

「・・どうしてですか？《え…？》お互いを名前で呼び合う程、僕と貴女はそれ程親しくもないでしょう？《そ、それは…そうだけど》なら別に必要無いでしょう？それじゃあ・・・」

「待って！《ちょ》私は、フェイト《・・っ！》フェイト・Ｔ・ハラオウンあなたは？」

・・・否だった
しかしフェイトは諦めずに立ち去ろうとするヴェナージの服の袖を掴む

そしてヴェナージを自分の方に振り向かせると彼の瞳をじっと見つめながら自己紹介を始めその時、ヴェナージが少し動揺を見せただが、フェイトはそれに気付かずに再び自己紹介をし次に彼に名前を聞くと・・・

「ヴェ、ヴェナージ・モルドレイド。これで良いですか？”フェイトさん”／／／」

「うん♪よろしくね”ヴェナージ”《し失礼しますッ》ふふっ・・・」

その後照れた顔を隠し逃げるようにして執務室を出るヴェナージ
フェイトはその照れ顔のヴェナージを頬笑みながら見送るのだった
＊＊＊

「…ちっ、仕方ないか……」

僕は改めて自分の失敗に後悔しながらある場所に向かった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課：海上訓練施設

ヴェナージは書類を提出した後、シャーリーに協力してもらい
海上訓練施設で1人、対ガジェット戦の訓練をしていた

「ハアアアァァァ！！」

『今ので終了です。モルドレイド2等空尉、お疲れさまでした』

ヴェナージの剣が最後のガジェットを切り裂く
そして訓練を終えたヴェナージがシャーリーの元に降り立つ
ヴェナージがデバイスを待機状態した後にシャーリーがヴェナージに話しかけてきた

「ガジェットはどうでした？モルドレイド2等空尉」

「ＡＩを搭載していると聞いていたから、厄介な物かと思ったけどＡＩの知能はそれほど高くないだから俺の場合は楽だったな…だが数で責められたら面倒だな」

「ＡＭＦは？」

「僕にはあんな物、有っても無くても同じだよ。見てて分かったでしょ？」

「そうですね　うふふ・・。そうだ♪折角だし色々聞いても良いですか？」

訓練を終えたヴェナージにシャーリーは質問を持ちかける
ヴェナージはそれに対し少し悩むが・・・

「・・あまり気は進みませんが訓練に付き合ってくれましたし少しなら構いませんよ」

「それじゃあですね・・・」

・・・ヴェナージは訓練に付き合ってくれた礼に彼女の質問に付き合う事にした
傍から見れば仲が良さそうな雰囲気を出すヴェナージとシャーリー

「あれはヴェナージとシャーリーか…」

偶々通りかかったシグナムに2人が話をしてるのが目に入る
仲良さげに話すヴェナージ達にシグナムは・・・

「アイツ、鼻の下を伸ばしおって……」

・・・ヴェナージと仲良さげに話すシャーリーに嫉妬をして不機嫌になる
その後、暫らくの間シグナムはヴェナージ達の様子を窺ってみる
良い雰囲気の中で会話してる2人にシグナムは・・・

「私も…アイツとあんな雰囲気で会話し…って！な、何を言ってるんだ私は！／／／／　はぁ…そろそろ行くか、アイツらに何をしてたのかと聞かれても困るし…はぁ…。」

そう言って再び歩き出すシグナム

部屋に帰宅した後もシグナムは２人の関係がずっと気になるのだった・・・・・・・・・。

story. 2（後書き）

桃子「今回で2回目ね・・」

珀狼「そうですね」

桃子「今ヒロイン候補はヴェナージ君をどんな風に思ってるの？」

珀狼「こんな感じです・・・」

なのは⇒仲良くなりたくてヴェナージの事が気になってる

フェイト⇒気になりかけてる異性

シグナム⇒既に陥落済み、だが自分の気持ちに気付けていない

珀狼「・・・でおわかりいただけたでしょうか？」

桃子「う～ん・・分かったような、分からないような・・もういいわ、ヒロインの投票はまだやってるのよね？」

珀狼「はい、次の更新日まではやろうと思います」

桃子「この話の更新日は土曜日で良いのよね？」

珀狼「はい、急用事等が無ければ毎週土曜日の9時頃に更新します遅れてもちゃんと土曜日中に更新できるようにします。」

桃子「それじゃあ、まあ次も頑張りなさい」

珀狼「はい」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

story. 3

翌日・・・。

朝、ヴェナージは書類仕事をしている時
そこにヴェナージが警戒してる彼女がやって来た

「おはよう　ヴェナージ君」

「…おはようございます　高町教導官♪」

一旦手を止め…いかにも”不機嫌です”と言わんばかりに言い返す
ヴェナージ
そんなヴェナージに屈せずになのはは会話を続ける

「にゃははは…。機嫌はどう？」

「最悪です♪」

ヴェナージは返事を清々しい笑顔でなのはに返し再び手を動かす
そんな彼になのはは頬を膨らませムッとした表情をしてみせる

「もっ～！どうしてそんな意地悪な事をいうのかな！」

「事実を言っただけですが？何か？」

可愛らしく怒ってみせるなのは
だがヴェナージの表情は崩れず書類仕事を続ける
そんな彼に対してなのはは、可愛らしくおねだりする感じで再アタ

ックをする

「ね～♪ヴェナージく～ん　仲良くしようよ～！」

「その内、気が向けばしてあげますよ♪《その内って何時なの？》7年後くらい♪」

「7年！？六課解散してるよ！？《そうですね♪》そこまで名前を呼ぶの嫌なの！？《はい♪》即答！？ねぇ！《ちょ…！》どうして！？」

なのははヴェナージの両肩を掴みブンブンと揺さぶる
言い返したいヴェナージだが揺さぶられて言い返す事が出来ない
相手を大きな声で威嚇し両肩を掴み激しく揺さぶる…傍から見れば脅迫の様である
しかし、じゃれているようにも見えなくもない……のか？
そんな中、ヴェナージ達の元にもう1人の副隊長の彼女が通りかかった

「ヴェナージ…何をしているんだ？」

「シグナム！丁度良かった。こ・の・教導官を・何とか・し・て・く・れッ」

ヴェナージはシグナムになのはを引き離す様に助けを求める
しかしヴェナージの願いは・・・

「…知るか」

「そんな～！シグナムうううう～！」

・・・儚くも散ってしまうのだった
涙目のヴェナージを尻目にシグナムは不機嫌な様子でヴェナージ達の元を後にした
シグナムが去るとなのはは再び彼の両肩を掴み勢いよく揺さぶる

「ねぇ！名前で呼んでよ～！」

「く、苦しいです…高町教導官…」

その後、暫らく2人のじゃれ合いが続いてると・・・

『ヴェナージ・モルドレイド2等空尉…至急、部隊長室にお越し下さい』

・・・ヴェナージに天の助け？による呼び出しがされる
その呼び出しにヴェナージは瞬時になのはの手を離すと・・・

「よ、呼び出されたので失礼します！高町教導官」

「あ！ヴェナージ君！もうッ！！」

・・・ヴェナージはその場から逃げる様に去って行った
＊＊＊

またやってしまった
私は、ただアイツとなっ仲良くなりたいだけなのに
だが…アイツが他の女性と一緒に居ると無性に腹が立つ

「…一体どうしたんだ。私は…」

本当にそうだ…どうしてしまったんだ？私は・・・。
自分でもどうすれば良いかが分からない

「…くッ！」

どうすれば良いのか分からない自分に更に腹が立つ
そんな苛立ちの中…私の思考にアイツがなのはやシャーリーと親しげにしてる場面が次々と思い浮かんでくる・・・

「…っ！」

・・・その瞬間、苛立ち以上に何故か私の胸…いや…”心”が痛んだ
どうして…？何故…？次々に思い浮かぶ言葉は私自身を問いただす
しかし、私は自分の事であろうその疑問の答えが出ない

「誰か…教えてくれ…」

私の口から本心が勝手に零れた・・・。
この苦しみにも似た悩みの正体を私は何時になったら知る事が出来
るのだろうか？
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課：部隊長室

呼び出しに応じ部隊長室に来たヴェナージ
そこで彼は、はやてからある質問をされるのだった…それは・・・

「僕の戦闘方法…ですか？」

「うん、そうや自分の部下の戦闘方法を知らんってのは流石に不味いやろ？それに戦闘時の指揮にも影響するし…だから教えてくれへん？」

・・・ヴェナージの戦闘方法についての質問だった
その質問にヴェナージは彼女に自分の戦闘方法を教えるべきか少し考えるが彼女の言う事は部隊長としては当然の事なのでヴェナージはあまり気は進まないものの彼女の質問に答える事にした

「僕の戦闘方法は…――――です。」

「成程な～・・・という事はヴェナージ君は――主体の――って事でええの？」

「そうですね、それで良いと思います」

自身の戦闘方法を語るヴェナージ
そんなヴェナージにはやては他の魔法を使わないのかと質問をする

「他の例えば＊＊攻撃魔法や＊＊魔法とかは使わへんの？」

「一応、ランク試験の対策に覚えてはいますが実戦で＊＊魔法を使った事はあまり無いですね…ましてや＊＊系の魔法なんか試験の時以来、全く使ってませんよ。僕が実戦で主に使うのは基本の＊＊

型の＊＊魔法ですよ…。まあ偶に＊＊系も使いますが…大体、僕の戦闘方法で＊＊系の魔法や＊＊魔法を使っても意味無いですし」

はやての質問である＊＊魔法を使わない理由を答えるヴェナージ

ヴェナージの説明に納得するはやて

そして、この説明後に・・・

「確かにそうやな～…。ありがとなヴェナージ君、戦闘方法については分かったわ…それと、もう1つ程質問してもええ？《構いませんよ》前にシグナムから聞いたんやけどヴェナージ君ってA級デバイスマイスターの資格を持っとるって本当なん？」

・・・はやては以前シグナムから聞いていたヴェナージがデバイスマイスターの資格を所持している事について確認をする

「本当ですよ。僕のデバイスは自分で組み上げた物ですし」

別に隠すような事でも無いのでヴェナージはそれを肯定する

するとはやては・・・

「そんなヴェナージ君に頼みがあるんやけど聞いてくれるか？」

・・・笑顔で頼みがあると言って来た

はやての笑顔にヴェナージは嫌な予感しかしないものの一応、内容を聞く

「…内容によります」

「実は新人達のデバイス作成の手伝いをして欲しいんよ…ダメ？」

「…僕の調べ物の邪魔にならない程度になら手伝いましょう」
ヴェナージの予想に反してはやてのお願いは以外と簡単な物だった
しかしヴェナージは任務や仕事以外は調べ物をしているのでヴェナージは、はやての頼みを少し悩み、調べ物の邪魔にならない事を条件にそれを了承した

「それでええよ、ありがとうヴェナージ君♪」

「いえ、もう行っても良いですか？《うん、ええよ》では失礼します」

その後、質問等を終えたヴェナージは部隊長室を後にした
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課：海上訓練施設

フォアード陣の新人隊員４人が午前の訓練を終えて一旦、隊舎戻ってる頃
ヴェナージは海上訓練施設で昨日と同じくシャーリーに協力してもらいガジェットを相手に訓練を行っていた

『ラスト３ですよ～！《了解》』

通信モニターからシャーリーが残りのガジェットの数をヴェナージに知らせる
ヴェナージはシャーリーに返事を返すと再び戦闘に戻った

「あそこか…行くぞ”スレイヴ”」

『Ｙｅｓ，　Ｍａｓｔｅｒ．』

ヴェナージはガジェットに近付き・・・。
ガジェットの手前でヴェナージは自身のＢＪのサイドスカートの上部に装備されている予備武装の内の１つ魔力刃サーベルに手を掛け・・・

「後、２つ…。」

・・・ガジェットの横を通り過ぎる際に魔力刃サーベルを抜刀しガジェット斬り付けた
その後ヴェナージが通り過ぎた後、ガジェットが爆発する
ヴェナージはそのまま次のガジェットに向かって行く・・・。

『Ａｐｐｒｏａｃｈｉｎｇ　ｍｉｓｓｉｌｅ．』

「数は？《４．》叩き落とせるな…。」

ヴェナージはそのまま方向を変えずガジェットに接近していく
それと同時に誘導弾もヴェナージに迫って来る
そしてスレイヴがヴェナージに誘導弾の接近を注意する

『Ｍａｓｔｅｒ．』

「分かってる…はぁッ…！」

ヴェナージは速度を落とさずに近付く誘導弾を次々に魔力刃サーベルで切り払いながらそのままガジェットに近付いく…ガジェットも急いでＡＭＦを展開させようとするが・・・

「これで、ラスト」

・・・ヴェナージの方が先にガジェットを斬り付けガジェットを破壊する

そして最後の1機に向かって行くヴェナージ

ガジェットも負けじと機体正面の黄色いセンサーから熱線を無数に放ち攻撃する

それをヴェナージは軽々と避けていきガジェットの背後に回ると魔力刃サーベルで後ろからガジェットをまず横に一閃ほど斬り付けて次に身体を回転させ何度もガジェットを斬りつけた…その後、ガジェットは分散しつつ爆発する

「戻るか」

『Ｙｅｓ，　Ｍａｓｔｅｒ．』

訓練を終えたヴェナージは見学者席に居るシャーリーの元に向かった・・・・・・・・・。

ガラドスレイヴ　通称：スレイヴ

ヴェナージが独自に制作した少し特殊なデバイス。

ヴェナージは近代ベルカ式なので語源は、ドイツ語の筈なのだが…スレイヴの語源は何故だか英語、制作者のヴェナージはその理由をフレームや武装の部分に金を使い過ぎて語源やその他の部分は安く

出回ってるミッド式の物を採用したとの事

story. 3（後書き）

桃子「今回＊や＊の表示が多くない？」

珀狼「仕方ありませんよ。隠さなければヴェナージの戦闘方法が丸判りでしたから」

桃子「何時まで隠すつもりなの？」

珀狼「そう長くは、掛からないと思いますよ。それに今回の訓練でかなりヒントが出ましたし分かった人も居ると思います（＾＾）」

桃子「分からない人は完全公開までお預けって事ね♪」

珀狼「まあ、そうなってしまいますが・・・何でそんなに楽しそうなんですか？」

桃子「いえ、別に～♪ところでヒロインはどうなったの？」

珀狼「その事ですが、投票日を次の更新日まで延ばそう思います。因みに現在は同票ですヒロイン候補はこの3人です」

なのは⇒仲良くなりたくてヴェナージの事が気になってる

フェイト⇒気になりかけてる異性

シグナム⇒既に陥落済み、だが自分の気持ちに気付けていない

桃子「次の更新日も土曜日で良いのよね？」

珀狼「はい、用事等で予定が狂わなければ土曜日の9時頃に更新します」

桃子「ヒロイン決まるといいわね」

珀狼「はい…」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

story. 4

訓練を終えたて見学者席のシャーリーの元に戻って来たヴェナージ
そこで彼を待っていたのは・・・

「お帰り♪ヴェナ～ジ君♪」

「はぁ…（ああ…そういえば訓練場は、アイツの庭だったな）」

・・・ヴェナージが会いたくない女性だった
なのはを見るなり即行でため息を吐くヴェナージ
そんな様子のヴェナージになのはは・・・

「…何かな？その”また出たよコイツ”って感じの顔は！？」

「何故、分かったし」

「むむむ～！《そんな顔しても…》ふみゃ！？／／」

・・・少し不貞腐れた顔でヴェナージの表情から考えを読みとるなのは
なのはに考えを読まれたヴェナージは真顔で驚く
真顔で驚いたヴェナージになのはは両頬を膨らませながら更に不貞腐れようとするが
その途中でなのはヴェナージに膨らませた両頬を手で軽く引っ張られ顔を近くまで
引き寄せられ途中で”ある事”を想像してなのはは頬を赤く染め目を瞑ったが・・・

「…1つも可愛くないぞ《ふ、ふぉっとひへよ！／／／》大体、考えが分かってるなら来ないでいただけますか？た・か・ま・ち教導官殿ッ…！《にゃッ！？／／》ふんっ…！」

・・・ヴェナージの現実味のある言葉に直ぐに夢から引き戻されたその後、両頬を引っ張ってる手を上下に数回振った後に少しキツく引きながら勢い良く

なのはの頬を引き終えるヴェナージ

「むっ～！女の子の顔を傷つけたぁ！責任取ってよ～！《それじゃあ…結婚でもしてやろうか？》ふぇ！？ほ、本当に！？で、でも／／／／／／」

なのはは冗談のつもりでヴェナージに責任を取れと言ったするとヴェナージはその冗談の返事を承諾して返すこれには流石のなのはも動揺したが・・・・

「まぁ、今はしたくても出来ませんが」

「……え？《僕は未だ17ですよ》……ああッ！！《くくっ…》ま、またからかったね！ヴェナージ君！／／／／／／／」

・・・またからかわれた事に頬を赤くしたまま怒る

しかし今のなのはは恐いどころか可愛らしいのでヴェナージは必死に笑いを堪える

その後、笑いを耐え抜いたヴェナージは…1服する為に胸の内ポケットから煙草を取り出すのだが…ある重大な事に気付く…それは・・・

「た、煙草が無い…だと…？」

・・・煙草が切れていた事だった
煙草が切れた事に驚きの色を隠せないヴェナージ
そして、危機迫る顔でヴェナージはなのはに向かってある事を言う

「高町教官！《は、はい！？／／／》今直ぐ！僕の為に売店で煙草を買ってきなさい！煙草の銘柄は黒☆魔だ、分かった？《はい！》じゃあ！行ってきなさい！」

「わ、分かりましたッ……！」

そしてなのはは走ってヴェナージの煙草を買いに向かった
此処で、なのはとヴェナージの様子を静観していたシャーリーが口を開いた

「…というかヴェナージ君、未だ未成年でしょうに《バレなきゃいいんだよ》はぁ～…。」

「それに細かい事は《良い訳あるかッ！！》…へ？」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』

「飛竜一閃ッ！」

──ブオッ！！──

「うをおおおい──！！こ、殺す気か！？シグナムッ！」

ヴェナージの発言にため息をつくシャーリー
その直後にヴェナージと親しい仲の彼女の怒声＋怒りの斬撃が飛ん

できた
飛竜一閃をギリギリで避けるヴェナージ
因みに飛竜一閃による剣先は明らかにヴェナージの頭部に狙いを絞っていた

「煩いッ！仮にも自分の上司に当たる人物を使いっぱしりにするなど！お前こそどういうつもりだ！《良いじゃん、その位》良くないッ！そのねじ曲がった根性叩き直してやるッ！勝負しろッ！《まぁ、まぁ、シグナム落ち着いて》放せ！テスタロッサ！」

「…ヴェナージもシグナムにちゃんと謝って…ね？」

少し後から新人達とヴィータと一緒に来たフェイトがシグナムを抑えつつ宥める
そして隊長のフェイトに言われてヴェナージも素直に謝ると一同が思いきや・・・

「かかってこいや！このピンクホルスタインッ！！」

・・・謝らないどころか怒り状態のシグナムに対し挑発で返事を返すそんなヴェナージにシグナムは当然・・・

「言ったな！勝負しろ貴様ッ！レヴァンティンの錆にしてくれるッ！」

「上等だ！ピンクホルスタインッ！負けても泣くんじゃねぇぞッ！」

・・・更に怒りを増し互いに売り言葉に買い言葉が止まらなくなり遂に2は模擬戦で決着を付ける事になり、2人は即座に騎士甲冑と

ＢＪ展開し訓練場の中央に向かって行った
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
Ｓｉｄｅ．フェイト

ヴェナージとシグナムが些細な事で…いや、あれはヴェナージの所為だけど・・・。
と、ともかく！２人が喧嘩をしようとしてるのは確かだから

「ともかく私、２人を止め──」

「止めずにこのまま見てたらどうですか？フェイトさん」

私が２人を止めに行こうとした時、シャーリーが私を止めた
そしてシャーリーが次に言った言葉・・・

「このままにしておけばヴェナージ君の強さが見れますよ？フェイトさん♪」

・・・”ヴェナージの強さ”この言葉に私は興味を惹かれた
私が皆の様子を見渡してみると…それぞれに興味を示してるのが表情に出ている
そんな皆の顔に私は２人を止めに行くのを思い留まった
そして止めに行くのを思い留まった私に突然・・・

「（…ヴェナージとシグナムどの位、仲が良いんだろう？）」

・・・そんな考えが思い浮かんだんだ
何故、突然そんな事を思い付いたのかは私にも分からない
けどヴェナージとシグナム２人が一緒に居るのが何故だか私は面白くない

前部隊も同じで今も同じ分隊2人が一緒に行動するのは珍しく無いけど・・・。
2人の事で少し不機嫌な私はある事を思う…それは・・・

「（もしかして…私――――…。）」

・・・でも、そうだと思うにはまだ早すぎる気がする
だって、私とヴェナージは出会ってまだ1週間も経ってないのだから
もう少し考えてみても遅くはない…そんな風に考え…いや、自分に
言い聞かせながら私は2人が向かい合ってるモニターに視線を移した
＊＊＊

「では、私が勝ったらどうなるのだ？」

「その逆だ、僕がお前の言う事を聞いてやる《分かった》じゃあ、そろそろ始めようか…シャーリー合図を頼む《は～い！それじゃあ～…》」

ヴェナージはシャーリーに合図をお願いする
そしてお願いされたシャーリーはノリノリで承諾し・・・

『始め！』

「いくぞ！ピンクホルスタインッ！」

・・・開始の宣言をする
その後ヴェナージは魔力刃サーベルを抜刀、展開しシグナムに向かって行った

「来いッ！今度こそ、お前のそのねじ曲がった根性叩き直してやるッ！」

ヴェナージが魔力刃サーベルを展開した
その後シグナムもＬＴを展開しヴェナージに向かって行った・・・・・・・・。

story. 4（後書き）

桃子「ヒロイン決まったって？」

珀狼「はい（＾＾）」

桃子「で、誰？《それは、後のお楽しみという事で！（＾＿＿）ー☆》ふ～ん」

珀狼「後、ヒロインは1人ですが、他の候補者だった人物達供一応、かなり良い、どころか、恋人じゃね？位の雰囲気にはさせます。でないと物語が進みませんので（＾＾）」

桃子「ふ～ん、まあ頑張りなさい、次はヴェナージ君ＶＳシグナムさんね」

珀狼「はい、いよいよ彼の戦闘方法をお見せします（＾＾）」

桃子「まあ、更新が遅れないように頑張りなさい」

珀狼「は、はい（；・∀・）」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

story. 5

・機動六課：海上訓練施設

ヴェナージは魔力刃サーベルを展開しグナムに接近する
それに対しシグナムもＬＴを展開し構え接近するヴェナージに備える
そしてシグナムの手前でヴェナージはサーベルを構え・・・

「…このッ！」

・・・身体を回転させながらシグナムの横を通り過ぎながら斬りつけようとする
これをシグナムは・・・

「ええい―《ッ！鞘！》―ッ！」

・・・咄嗟に鞘で防御する
ヴェナージはそのままシグナムの横を通り過ぎると・・・

「…加速」

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｒｕｓｈ』

・・・加速魔法をし凄まじい雷鳴と閃光の後、その姿を消す
姿を消したヴェナージに見学者達は・・・
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・海上訓練施設：見学席

見学席にも雷鳴と閃光が見え聞こえする
その後ヴェナージが消え驚くスバル・・・

「キャッ！…。あれ？ヴェナージさんが消えた…？」

「バカスバル、人が消える訳ないでしょ！何か移動系の魔法よ」

「流石ティア！でティアは何の魔法か分かる？《えっとそれは…》」

・・・そんなスバルにツッコミを入れるティアナ
しかしティアナもどんな魔法かとスバルに聞かれると口籠ってしまう
そんな時、以外にもシャーリーが口を開き・・・

「あれはライトニングラッシュ、フェイトさんの使ってるブリッツ系の魔法を強化、発展させた魔法って言っても過言じゃない魔法ね。発動する時、稲妻のような凄まじい雷鳴と閃光が発生するのが特徴ね…ってあれ？みんなどうしたの？」

・・・ヴェナージの発動した魔法の説明をした
すると一同はシャーリーを見ながら驚いた表情をする
そしてティアナが一同を代表するかのようにシャーリーに質問してきた

「シャーリーさん…ヴ、ヴェナージさんと話した事あるんですか？」

「え…？あ、うん普通に話したりしてるけど？それが、どうしたの？」

ティアナの質問にシャーリーは普通にヴェナージと話しをしたりしてる事を答えると一同は更に驚いた表情を見せる
そして次はスバルがシャーリーに質問をしてきた

「ヴェナージさんってどんな人ですか？」

「えっ…と、カッコイイ系の感じで気さくな…って何で私に聞くの？」

シャーリーは質問に答えてる途中でスバルは何故ヴェナージの事を聞いてきたのかが気になりスバルに聞き返した。するとスバルは・・・

「えっ…と私達ヴェナージさんと自己紹介の時以来、私達が近寄ってもあからさまに嫌な顔をされてまともに話しをした事が無くて…」

「それで気になっていたと？《はい…》ん～…おっかしいな～…普通にヴァイス陸曹やグリフィス、アルトやルキノ達には普通に話しをしてるけど……あ！」

スバルは自分達がヴェナージとまともに話をした事が無いとシャーリーに言う
それを聞いたシャーリーは普段のヴェナージからは考えられない様で物凄く困惑した表情をして悩みだす、そして暫らく悩んでると・・・

「どうしたんです？《スバルちょっと聞くけど》はい…」

・・・シャーリーは何かを思い付いたらしくスバルにある事を聞くそれは・・”近くになのはが居たか”というものだった

「あのね…スバルが近寄った時って”なのはさん”居た？」

「えっと…確か…居たと思います」

「あ・・あはは・・・はは・・・・。それでか～…」

シャーリーの質問にスバルはその時の事を思いだし”なのは”が居た事を伝える

するとシャーリーは苦笑いをした後、納得しスバルにある事を伝える…それは・・・

「あのね、スバル。ヴェナージ君が嫌な顔した理由は”なのは”さんが居たからだよ。ヴェナージ君って”なのは”さんの事が苦手なんだって《なのはさんが？》うん、だから”なのは”さんが居ない時に話しかけみて、多分普通に話してくれるは・・・ず・・・」

「シャーリーさん？…あ…」

・・・ヴェナージの”なのは”を苦手としている事

それ故に”なのは”が居ない時に話しかければ普通に話してくれるらしい…とシャーリーが理由を言い終わってふと横を見ると…そこには・・・

「…私だけ・・・苦手なんだ…」

「あの！シャーリーさん、ヴェナージさんってどんな戦闘スタイル何ですか？」

・・・ヴェナージの煙草を買って来たなのはが立っていた
重苦しい雰囲気が辺りを包む中…エリオが場の重い空気を晴らすかの様にシャーリーにヴェナージの戦闘スタイルについて質問をした

「う、うん！ヴェナージ君の戦闘スタイルは…目標に高速で一気に接近し必殺の一撃を叩き込んで撃破してその後、離脱するといった”一撃離脱”の戦闘スタイルだね」

「それって…」

「うん、ヴェナージ君はエリオの戦闘スタイルに似ているんだよ」

「そうなんですか～！」

エリオは自分と同じ戦闘スタイルの人物が居るのが嬉しいのか目を輝かせている
そこにキャロがある質問をしてきた

「あの～シャーリーさん《何？キャロ》ヴェナージさんとフェイトさんってどっちが速いんですか？」

「バカねぇキャロ、そんなのフェイトさんに決まってるでしょ」

「そうだよ、キャロ」

「うん、流石に僕もフェイトさんだと思うよ」

キャロの質問に新人達は次々にフェイトの方が速いという

これにはなのはやヴィータも同意見なのかキャロの意見に若干、苦笑いをするが・・・

「――…速さはヴェナージ君の方が速いですよ？」

・・・シャーリーの返答は違った

一同は、信じられないという表情をして

「いや、いや、シャーリーさん幾らなんでもフェイトさんよりも速いってのは・・・」

「そ、そうですよ！そんな訳…《じゃあ、説明してあげる》」

ティアナとエリオがシャーリーに食いかかった

他の人物達もフェイトの方が絶対に速いと思っている為か表情が険しい

そんな中、シャーリーはヴェナージの速さの説明を一同にし始めた

「恐らくフェイトさんとヴェナージ君は元々は同じ感じの資質を持った魔導師だったのだと思います、それでフェイトさんは高い機動力を生かしつつも、全距離に対応できるオールレンジアタッカーに成長したのに対しヴェナージ君は持っていた高い機動力を重点に強化していく事でフェイトさんをも凌ぐスピードを獲得した訳、分かった？」

「なっ、成程…」

「・・・（ヴェナージって私よりも速いんだ…今度模擬戦に誘ってみようかな♪）」

シャーリーの説明が終わり一同がヴェナージの速さに納得してる時に、その中で約1名…フェイトはヴェナージを模擬戦の相手に狙いを定めていた
一方、その頃…模擬戦中のヴェナージとシグナムは・・・
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課：海上訓練施設

・・・ライトニングラッシュの効果で消えたヴェナージ
それに対してシグナムは目を瞑ってＬＴを構えヴェナージの気配を探ってみる

「（…気配はある…が…流石に正確には捉えられないな…なら、炙り出してやるか）…レヴァンティンッ！」

『Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ.』

シグナムはＬＴをシュランゲフォルムの状態にして下のビルを自分を中心に次々に円形状に斬り付ける…斬り付けられたビルは次々に倒れてシグナムの周囲に大量の砂塵が舞い上がり周囲を包んでいく…その時、僅かに砂塵が不自然な舞い方をする
そしてシグナムは不自然な舞い方をした方にＬＴの剣先を投げつけ・・・

「そこか┃《なっ！？》┃ッ！」

・・・ヴェナージを炙り出した
予想外の攻撃にヴェナージは思わず足を止めた、シグナムはその隙にＬＴをシュベルトフォルムに戻すと追撃を与える為にヴェナージ

に向かって行く

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．』

「紫電いっ━《クッ！》━なッ！？」

シグナムは炎を纏わせたＬＴを左から右にかけて振り抜く！
それをヴェナージは身体を後ろに逸らせてそれを避け更に身体を左に回転させながら
シグナムの間合いから離れると魔力刃サーベルを腰に収め・・・

「━━…ガラドスレイヴセットアップ」

『Ｓｅｔ　ｕｐ．』

・・・スレイヴを起動した
ヴェナージの指示により基本形態に起動したスレイヴ
その刀身は見る者を魅了するかの様な黄金の輝きを放っている

「ようやく”スレイヴ”を出して来たな・・・」

「まあな…これ以上続けば”全てを出しそう”だからな…そろそろ、決めさせてもらう」

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

ヴェナージがスレイヴを出して来た事でシグナムの顔が真剣になる
そしてヴェナージはシグナムに返答した後…カートリッジを補充させスレイヴの黄金の刀身に雷を纏わせてスレイヴを構える

「…つれないな」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．』

それに対しシグナムもＬＴにカートリッジを補充させ刀身に炎を纏わせてＬＴを構える

その後、両者は無言で剣を構えたまま真正面から突っ込んでいく

「紫電！」　「雷神」

「「一閃！！」」

互いの剣が合わさりお互いの魔力がぶつかり合う

そして凄まじい轟音と雷鳴の後、空に向かって巨大な火柱と雷柱が立ち上る

「このおおおおおお――――――ッ！！」

「はあああああ――――ッ！！」

２人の凄まじい魔力と技の衝突が続く・・・。

そんな中、ヴェナージは右手の魔力を強めて左手を剣から放し・・・

「っ！しまった！」

・・・リアスカートから拳銃型のデバイス「４１（ヨイチ）」を抜き取る

そして４１をシグナムの腹部に直接突き付け・・・

「バイバ～イ♪」

・・・その後、数発の魔力弾を零距離で発射する
発射後に煙が巻き起こるその中から、意識を失ったシグナムが落ち
ていく・・・

「よっと…」

・・・落ちていくシグナムに４１を向け発射
４１の銃口から魔力ワイヤーを射出
射出されたワイヤーはシグナムの身体に巻き付け落下を阻止する

「重っ…」

その後、ヴェナージはシグナムをぶら下げたまま見学者席に戻って
行った・・・・・・。

story. 5（後書き）

桃子「今回で5回ね」

珀狼「そうですね（＾＾）」

桃子「今回は少し長めね」

珀狼「本当は2話編成にしようと思いましたが2話編成だと片方が短くなってしまうので1話で纏めました、それで少し長めになってしまったm（__）m」

桃子「そう、それじゃあ今回はこの辺で！」

珀狼「それでは！（＾＾）」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

story. 6

・海上訓練施設：見学席

戦闘を終えたヴェナージは４１のワイヤーでシグナムを巻き付ける
そしてぶら下げたまま見学者席に帰ってきた

「ふぅ～…到着っと、結構重かったな、胸の所為か？さてと、ワイヤーを回収っと・・・」

「ヴェナージ君！」

「どうしました？”微妙な大きさの胸”約して”微乳”のなのはさん！」

ヴェナージがシグナムに巻きついたワイヤーの回収している
するとそこになのはが声を掛けてきた
ヴェナージは、なのはに付けたあだ名？で返答した、そのあだ名？になのはは・・・

「まずは、はい煙草《ども、》そ、それと！びび微乳って何かな！？とっても恥しいんだけど！？《良いじゃないですか、別に》よくないよ！／／／」

・・・顔を真っ赤にしながら自分についたあだ名？に反論する
なのはが近くで反論する中、ヴェナージは黙りながら先程なのはに買って来てもらった煙草を開封し、それを１本程口に咥え火を点け吸い始める

「フゥー…。じゃあどんな呼び方が良いですか？《普通になのはさんとか、後…呼び捨てで”なのは”とか》イヤですよ《即答！？何で！？》だって…イヤだし」

「理由になって無いよぉ！《ちょ！》ねぇ！《うわっ！？》ねぇってば～！」

「や・め・て・く・だ・さ・いいいいい～～～～！！」

またも仲良くじゃれ合うヴェナージとなのはそんな2人の様子を見たフェイトは・・・

「むぅ…（ヴェナージ”私じゃなく”なのはとイチャイチャしちゃって…！）ねえ、なのは少しヴェナージと話しをさせて《うん、いいよフェイトちゃん》ありがと…、ヴェナージ」

「ふぁい…何れすか？《だ、大丈夫？》ふぁ…ひちよふ・・」

「そ、そう…、それでヴェナージ、シグナムどうするの？」

・・・咄嗟に先程戦闘で気絶したシグナムの事をヴェナージに聞いてみた

するとヴェナージは吸っていた煙草を携帯灰皿で消してシグナムの方に向かって行くそして気絶しているシグナムを・・・

「よっこいしょ…やっぱ重いな」

「え…？」

・・・ヴェナージはそっとお姫様だっこをして抱き上げる
その光景に一瞬、思わず息を飲むフェイトと一同
その後フェイトはシグナムをお姫様だっこする理由をヴェナージに尋ねる

「ヴェ、ヴェナージ…ど、どうしてシグナムを”そういう風”に持つの？」

「これですか？《うん…》それは…背中に背負った方が彼女の胸が僕の背中に当たり
僕としては”色々”と嬉しい限りなんですが…その場合だと、彼女が目を覚ました時に確実に僕の命が危険になるので”こういう風”にしたのですが…？いけませんでしたか？《なら…いいけど…》なら、医務室に連れて行きますね」

「う、うん…分かった」

ヴェナージはそう言ってシグナムをお姫様だっこしたまま訓練施設を後にした
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
Ｓｉｄｅ．シグナム
・？？？．？？？？

「う、う～ん…此処は…？」

私は…確か、ヴェナージとの模擬戦で倒された筈、だが…。
それに…此処は何処だ？少なくとも私の部屋では無く…部屋の雰囲気からして医務室でも無いな・・・

「…ん？これは…」

・・・起きあがって周囲を見渡すと写真立てが目に入った
どうやら家族の集合写真の様だ…よかったこれで誰の部屋か分かる
事が出来る
そう思いその写真を良く見てみると・・・

「ヴェナージ…」

・・・それはヴェナージと彼の家族の写真だった
この集合写真のヴェナージは見た限り大体、９歳前後というところか
る訳だ」

「これが、ヴェナージの姉か…成程、アイツがなのはを苦手にす

写真に写るヴェナージの姉の顔は少し前のなのはに何処となく似て
いるな
奴が語った数少ない昔話に姉の事を言った話の話が記憶が甦る

『姉…？《そっ♪》お前、姉が居るのか？』

『…正確には”居た”んだけどね…僕の事は何でも分かってしま
う究極のお姉ちゃん結局、一度も驚かす事が出来な…いや、最後の
時は驚いていたな…』

この時のヴェナージの顔の影が悲しみに満ちていたのを私は見逃さ
なかった
その後…私は、奴の”姉が居た”という言葉と悲痛の表情が頭に残
ってたいけない事と知りつつも私はヴァイスと一緒に奴に内緒で奴

の経歴を調べる事によってその発言の意味が分かってしまった

――――――――…奴(ヴェナージ)にはもう家族が居ないのだと…――――――――

私達はヴェナージに経歴を調べた事を言った
幾らかの咎めを覚悟していた私達だったが奴は

『あっそ…』

たったそれだけだった
私とヴァイスは慌てて奴にそれで良いのか？と言うと・・・

『別に君達が勝手に僕の経歴を調べようと…僕の復讐(すること)は何１つ変わらないから』

・・・私は奴の言った”すること”に一抹の不安覚えたが聞かなかった
いいや、違う聞けなかったんだ
今の私とヴェナージの関係が崩れそうだったから
そんな事を思い返してると・・・

「ん…？起きたのか？」

・・・部屋の主＝ヴェナージが帰って来た…もう少し後でも良いのにそうすれば奴と一緒に…いや、止そう
奴は私が起きてる事に気付き声を掛けてきた
……
・機動六課：ヴェナージの自室

「お前が私を部屋に連れ込んだのか？／／／」

シグナムは顔を赤らめつつ問いかける
するとヴェナージは呆れた表情を見せた後に懐から煙草を取り出し
それを吸い始める
そして煙を吐き出すとヴェナージは喋り出した

「フゥー…。全く、人聞きの悪い…僕は模擬戦後に君をシャマル医務官の居る医務室運んだだけじゃ無く診察後も君を君の自室まで運び部屋に鍵が掛かっていたからまた君を担ぎこの部屋まで運んで僕のベッドで寝かせてあげたというのに」

「そうか…ところでどうやって担いだんだ？《俗にいうお姫様だっこ》なっ！？／／／／／／」

シグナムは運ばれた方法を聞き顔を真っ赤にする
部屋にあるテーブルに置いてある灰皿に灰を落とすヴェナージ
そして赤面のシグナムにお構いなしに話を続けていく

「…それで人の家族写真がそんなに珍しかったのか？何ならあげようか？家族写真（それ）《なっ！？》冗談だ…他の写真は家と一緒に燃えてしまってそれ1枚しか見つける事が出来なかったんだ頼んでもあげないよ」

「…そういう事は冗談でも言うもんじゃない《ほっとけ》…」

ヴェナージの棘のある言い方に黙るシグナム
少し間、重い雰囲気が流れた後何時までも帰らないシグナムにヴェナージが口を開く

「…まだ用があるの？《…》黙ってたら分かんないんだけど」

「それでは…聞いても良いか？《何を》お前は、私が普通の人間ではない事を知ってるな？《フゥー…。…それで？》それで主はやての知り合いの博士セシィ・ドライという人物がな・・・」

「！！？（セシィ・ドライ！？…デバイス製作に関しては世界でも指折りの製作者でもそれだけでは無くそれと同時に医療の権威でもある天才…現在はポイニクセル王国の王子の元に嫁ぎ名を変えたと聞いたが…まあどっちでもいいか）」

下を向きながら話すシグナムの口から”セシィ・ドライ”というビッグネームが出た事に一瞬だが流石のヴェナージも表情を変える程に驚いてしまった

そしてシグナムは驚くヴェナージを余所に話を続ける

「・・・私にいや私を含めヴィータやシャマル達に”普通の人になるか？”という提案をしてきたんだが…どう思う？」

「何でそんな事を僕に聞くの？そういうのは自分で」

「自分で決められなく悩んでいるからこうして聞いてるんだ…」

――――――…なら、普通の人間になればいいじゃん…――――――

シグナムの真剣さに諦めたのかヴェナージは煙草の火を消し意見を言い始めた

急に言い始めた為にシグナムは少し間抜け表情をしながらも耳を傾ける

「…何かをやらずに後悔するよりやって後悔する方が何倍もマシだと僕は思うけどねまあ、これは僕の意見だし君がどうするかは知らないけどね…こんな感じでいいか？」

「す、すまない参考になった／／／」

「…だったらもう帰れ、僕は眠いんだ《冷たいな》おい、ベッドを盗るなよ」

ヴェナージが帰る様にシグナムに言う
すると何故かシグナムは先程寝ていたヴェナージのベッドで横になり布団を掛ける

「今日はもう遅いし此処で寝ようと思ってるんだが？《帰れ》断る」

ヴェナージはシグナムが掛けている布団を剥ぎ取ろうとするもシグナムが何故か必死に抵抗する為仕方なくヴェナージは・・・

「…解せぬ」

・・・ソファーの上で横になり寝る事にした
翌日、シグナムは早速自らの意見をはやてに言いその後、数日の休暇の申請
そして2日後、彼女は六課を一旦離れセシィの居る王国に向かった
言うまでも無いが、その数日の間シグナムの代わりはヴェナージになる
だが彼は・・・

「…え？何で…？」

・・・と、あまり納得していない様子だった・・・・・・・・・・・・・・・。

story. 6（後書き）

桃子「何とか間に合ったわね」

珀狼「は、はい…。（；´∀｀）」

桃子「さて…今回は、えっと…シグナムさんが人間になるって事なの？」

珀狼「はい、理由は今のとこ言えませんけどね」

桃子「ふ～んで、次回は？」

珀狼「このシグナムの居ない数日、彼が教導に参加する話にしようと思います」

桃子「そう、それじゃあ頑張りなさい」

珀狼「はい（＾＾）」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

story. 7

・機動六課：海上訓練施設

ヴェナージの助言？で人間になる事を決意したシグナム
その彼女は現在、ポイニクセル王国のセシィ・ドライ博士に処置を受けている
表向きは王国に数日程旅行に行った事になっている
そして・・・

「で、何する？」

「ぼ、僕に聞かれても…」

・・・ヴェナージはシグナムの代役を強制的にさせられていた
そして今日は同じ分隊のエリオの指導に来たのだが…。
シグナムとは違いヴェナージは訓練は元より新人の模擬戦相手としても顔を出したりしていないので…何をしたらいいか考えていた

「…サボる？」

「ダメですよ！それは！《え～…》え～じゃなくて！！」

「真面目君め…大体、僕は1度も君達の訓練見た事無いから分かんないよ…あ、そうだシグナムは訓練に参加した時は何してたの？」

ヴェナージはエリオにシグナムとの訓練の様子を聞く
するとエリオは少し考えた後に答え始めた

「シグナム副隊長は偶に模擬戦の相手をしてくれに来てくれますよ」

「模擬戦かよ…。《はい！》何故、元気よく答えるの？僕にやれってか？」

「え…？してくれないんですか！？《しません》そんな～…。」

シグナムと違いヴェナージは模擬戦の相手をしてくれず落ち込むエリオ

落ち込むエリオを見てヴェナージは

「（コイツ戦闘狂かよ！？うちの隊長といい副隊長といいスターズの新人もそうだっけ？ともかくホント此処の部隊はこんな奴ばっかだな！）」

自分の分隊に居るバトルマニア達の所為で少し自分の感覚を疑うヴェナージ

金髪のアホ毛巨乳の隊長は『戦ろう？ヴェナージ♪』と背後から突然声をかけてくる

これは最近のヴェナージにとって軽いホラーである

「全く…ん？…なぁ、モンディアル」

ヴェナージはエリオの親譲りの戦闘狂の部分に呆れて目線を逸らし余所を向くと、ふとヴェナージは訓練前に飲んだスポーツ飲料が目に入った

「はい、何でしょう？」

「お前、・・・・・って知ってるか？」

「はい？」

エリオはヴェナージのある質問に首を傾げてしまった

ヴェナージの質問とは・・・？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課：海上訓練施設　（なのは組）

ヴェナージがエリオに質問をした少し後、なのはの指導の元別の場所で訓練をしている

新人４人のリーダー的存在のティアナともう１人のライトニング分隊のキャロ

「次、いっくよ～！」

「「はい！」」

なのはの魔法弾が数発２人に向かって行く

それを次々に捌いて行くティアナとキャロ、その捌いた魔法弾の１つが奥の方へ向かって行くが…何故か撥ね返って来た、２人は何とか刎ね返った弾を避ける

──Ｂｌｉｔｚ　ｋｎｉｆｅ．──

「ハァ…ハァ…ど、どうして？」

ティアナが息を切らしながら弾が撥ね返って来た方を見る
すると、その方角から両手に数本の魔力光で出来た投擲剣を装備したヴェナージが姿を見せた…その後、ティアナ達の前に来るとヴェナージは投擲剣を収める

「やれやれ…後、もう少しで直撃だったな〜…危ない、危ない」

「どうしたの？ヴェナージ君、エリオとの訓練は？」

なのははヴェナージにエリオとの訓練の様子を窺う
すると面倒臭そうにヴェナージはそれに答え始めた

「言われなくてもちゃんと、やってるよ。面倒臭い女性だねホント」

「むっ…どんな訓練をしてるの？」

「かくれんぼ」

「か、かくれんぼ！？ど、どうして！？」

なのはは少し不貞腐れた表情をしながらエリオとの訓練の内容を聞く
その内容は”かくれんぼ”だった
内容が内容だけに驚くなのはとティアナ達
するとヴェナージはため息をついた後理由を話し出した

「…捜索能力の向上の為…？」

「聞かないでよ」

「いや、だって何したらいいか分かんなかったし」

「模擬戦とかは？」

「模擬戦…？プッ…アハハハハ！僕がやったら只の弱い物イジメだよ～」

なのはがヴェナージにエリオと模擬戦でもしてみたらと提案する
だがヴェナージはそれを笑いながら否定した

「モルドレイト副隊長！」「キャロ？」

「ん？誰だっけ…あ、確かるルル…ルシエ3士だったよね、で…何かな？」

ヴェナージが笑っていると突如その笑いを遮る声がした
その声の主は、同じ分隊のキャロだった、キャロは険しい表情で言葉を続ける

「エリオ君はそんなに弱くありません！戦っても《だったら戦ってあげようか？》え…？」

キャロはエリオの事を笑ったヴェナージに怒声をぶつける
しかしそれは途中でヴェナージに遮られる
その後、言葉を続けていくヴェナージ

「その代わり…僕が満足しなければ《ど、どうなんです・・？》此処であのガキを潰すけど良いかな？一応、殺さないけど…、それ以外は保障出来ないよ？僕、こう見えても結構沸点低いし、これ脅

しじゃないから♪ヴァイス辺りに聞けば分かるよ」

そう言うヴェナージの目は、キャロでも分かるほど凄まじい殺気を放っていた

近くの居るなのはもヴェナージの目に圧倒され声を出せない

ティアナは全身から冷や汗が噴き出す様に出るのを感じた

そんな中、キャロは・・・

「きょ、局の人がそんな事言って良いんですか！？」

「構わないさ」

・・・必死に抵抗する様にヴェナージに言い返す

だが、キャロの抵抗はあっさりとへし折られた

その後、ヴェナージは先程とは比べ物のにならない位の殺気を目に込め

「…僕は、正義とか秩序とか…そんな言葉、言うだけで虫唾が走る程に大嫌いなんだよ僕が管理局に”居てやる”理由は他にある《ほ、他って》教える義理は無いね」

そう言うと、ヴェナージは向きを変えなのは達の元を去って行った

ヴェナージが去った後、ティアナ達はその場にへたり込み、なのはも呆然と立ち尽くし

皆、暫らくの間、その場を動く事が出来なかった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課：海上訓練施設　（ヴィータ組）

「（あの程度の殺気で立尽くしやへたり込むとは…大した事無い

な）…ん？あれは」
なのは達の元を去ったヴェナージ
煙草を吸いながら歩いているとヴィータとスバルの訓練が目に入って来た
「いくぞ！アイゼンッ！」『Ｊａｗｏｈｌ．』
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．』
ヴィータはアイゼンを振りかぶると
シールドを展開してるスバルをシールド越しに叩く
アイゼンの威力に押されて砂埃を出しながら後ずさるスバル
そんな２人の訓練の様子を見たヴェナージは・・・
「うわ～…過激だね～…」
・・・他人事の様な発言を言っていた
すると、ヴィータがヴェナージに気付き近寄って来た
「エリオとの訓練はどうしたんだ？ヴェナージ」
「今、訓練のかくれんぼしてる最中」
「…何でかくれんぼなんだ？」
「め…他に思い付かなかったから、こうしてかくれんぼしながら他の人のを見て参考にしようと思って歩居てるって訳」
ヴィータがヴェナージにエリオとの訓練の事を聞いてきた

なので正直に？ヴェナージはヴィータの質問に答えた

「剣の打ち合いでもしてれば良いんじゃねぇのか？《ダメだ》どうしてだよ？」

ヴェナージの答えにヴィータは少し呆れつつも訓練の提案をしてくれた

だが、ヴェナージはその提案を即答で断る

流石に即答での断った為にその理由を聞くヴィータ

するとヴェナージは少し、険しい表情をしながらこう答えた

「エリオに怪我をさせたら隊長（フェイトさん）に殺される」

「そんな訳《あるッ！》うおっ！？」

ヴェナージの良い訳に呆れるヴィータ

戻って来たスバル近くで苦笑いを浮かべている

その後、ヴィータがヴェナージの意見を否定しようとすると急に強くヴィータの言葉を遮る

急に強い声を上げるヴェナージに驚くヴィータ達

ヴェナージはヴィータの両肩に手を置くと・・・

「そんな訳ある！あの人マジで恐いんだよ！というか、何であんなに恐いの！？本当に意味分かんないんだけど！？」

「お、落ち着け！後、近い、近い！／／／／／／」

「わあ～／／／」

・・・肩を揺らして必死に訴える

無我夢中で顔が近い事に気付かないヴェナージ
見方によってはキスをしてると勘違いしてもおかしくない程、現に
1名既に勘違いしてる
そんな状況の中・・・

──何をしてるのかな？ヴェナージ──

「た、隊長！？…《ヴェナージ？》ふぇフェイトさん」

・・・恐い人がエリオと一緒に現れた
フェイトの登場で顔が一気に青くなるヴェナージ
笑顔？のフェイトはヴェナージへの質問を続けていく

「うん♪…それでヴィータと何をしてたのかな？」

「な、何もしてませんが《嘘はダメだよ？》いや、本当ですよ！？」

「分かった♪《何故、バインドで縛、ムグッ！？》ちょっと一緒に来ようか」

そして恐い人はヴェナージの全身をバインドで拘束した後、ヴェナージを引き摺りながら奥の方へと消えていった・・・・・・・・・・・・。

ｓｔｏｒｙ．７（後書き）

桃子「今回は日常って感じね」

珀狼「そうですね」

桃子「次話はどうなるの？」

珀狼「更新はするかどうかはＴＰＰ次第でしょうね、こればっかりは」

桃子「そうね、それじゃあ！今回はこれで」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

story. 8

・機動六課：休息室

シグナムが帰って来て数日後
ヴェナージは休息室でヴァイスと雑談していた
そんな中、ヴァイスはある質問をヴェナージにしてきた

「…彼女？僕が？冗談でしょ？」

「イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう？」

にやけた顔でヴェナージにそう言うヴァイス
そんなヴァイスに対してヴェナージは呆れ顔で質問に答える

「もしそうだったらもう作ってるつーの！…大体、こういう事に関しては君の言う事は少しずれてるよ《そうか？》そうだよ、全く」

「アッハハハハ！違いねぇ！」

「笑う事無いだろう…」

そんな感じに雑談を楽しむ2人
だが、この雑談を盗み聞きしてる人達が居た
＊＊＊

『…彼女？僕が？冗談でしょ？』

彼女！？一体どんな会話なの！？
これは、是が非でも聞かないと・・・えっと、此処に隠れてっと・・・。

『イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう？』

ヴァイス君、何言ってるのかな？撃つよ？
ヴェナージ君を惑わすような事は止めて欲しいんだけど…？

『もしそうだったらもう作ってるつーの！…』

えぇ――――ッ！？
そうなの！？私、あんなに頑張ってるのに！酷いよぉ～…。
ん～でも、私嫌われてるし…どうしよう？アレ…？何か忘れてるような…。

「あ…！早く戻らないと！！」

い、急いで訓練施設に戻らないと！
＊＊＊

・・・どういうことかな？
ヴェナージに彼女？まさか…あ、やっぱり違うんだ、よかった♪

『イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう？』

……ナニヲイッテルノ？ヴァイス
ヴェナージを変に惑わさないで欲しいな…ん？ヴェナージがモテる…？これが本当なら
急がないと……えっと何をだろう？えっと・・・もしかして・・・。

「私、ヴェナージの事好きなのかな・・・？／／／」

うん、多分そうなのかもしれない
でも・・・どうすればいいんだろう？鱚！？違う！ききキス！？それともデート！？

『もしそうだったらもう作ってるつーの！…』

え！？そうなの！？でも・・私、多分それなりにアタックしてると思うんだけど・・・。
どうして・・まさかヴェナージって鈍感？
だったらもっと積極的にアタックをかけて・・・

「お～いフェイトちゃ～ん」

・・・あ、はやて・・・忘れてたい、行かないと・・・／／／
＊＊＊

折角、ちゃんとした人間(ひと)になって戻ってきたというのに・・・。
あの馬鹿ときたら・・・

『よかったね！』

・・・それだけかッ！
もっと他に掛ける言葉があるだろうが！全く…。
まあ、アイツにそんな事を期待しても無理か・・・ん？これは…あの馬鹿とヴァイスの声か
あいつら雑談でもしてるのか？少し行ってみるか

『…彼女？僕が？冗談でしょ？』

か、彼女だと！？そんな馬鹿な！？…ああ冗談か…全く紛らわしい！
思わず、壁に隠れ盗み聞きする感じになってしまった
と、取り敢えずこのまま様子を窺うか・・・

『イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう？』

・・・何故、貴様(ヴァイス)がそんな事を知っている？
というか・・そうなのか？アイツは言う程に女性に人気があるのか！？
知らなかった…た、確かによく女性局員からヴェナージの名前を聞くが・・・。

『もしそうだったらもう作ってるつーの！…』

そ、そうだよな！うん！焦ってしまったぞ…。
でも・・イロイロと急がないといけない様だなこれは…
きょ今日の夜・・少し頑張ってみよう／／／

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課：休息室

「…ところでヴェナージお前、好きな女のタイプって居るか？」

盗み聞きしてる人達が去って暫らく経ち

雑談メンバーも1名グリフィスが増えて3人で雑談をしていると・・・。

ヴァイスがヴェナージに好きな女性のタイプ事の聞いてきた

「…何でまたそんな話しを？」

「それは僕も知り《君はルキノとイチャついてれば良いよ》な！？／／／／」

ヴェナージは冷たい視線でヴァイスに理由を聞く

ヴァイスと一緒になって知りたがってたグリフィスをヴェナージは一言で黙らせる

「グリフィスの野郎の話は後で聞くと《聞かないで下さい！／／／／》煩い！このムッツリスケベ《ムッ、ムッツリ！？》で、どうなんだ？好みの体型とか性格とかは？」

ヴァイスに”ムッツリスケベ”と言われ慌てふためくグリフィス

そんなムッツリを放って置きヴァイスはしつこくヴェナージに女性のタイプを聞いてくる

「┃…ハァ～…。答えないとダメ？《ダメだ》好きな体型？ねぇ…ん～フェイトさんかな」

ヴェナージは遂に折れてヴァイスの質問に答えた
彼の好きな体型？は同じ分隊の隊長のフェイト・Ｔ・ハラオウンとの事
この答えにヴァイスはイヤらしい笑顔で・・・

「ほう～フェイトさんか、イイ線選ぶね～♪」

・・・と答えるこれで終わるとヴェナージは思ってた
だが、ヴァイスはイヤらしい笑顔をしたまま・・・

「で？性格は？《えぇ～…》えぇ～…じゃねぇよ。ほら答えろ」

「性格は…──」

・・・話を続けてきた、これで済むと思ってたヴェナージは肩を落とす
仕方なくヴェナージは面倒臭そうな顔をしながらその質問に答えようとした…その時・・・

『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』

・・・警報が鳴りモニターに”一級警戒体制”のアラートが表示される
雑談メンバーは雑談を止め仕事モードに切り替え・・・

「─…お仕事だね」

「そうみたいですね」「よしッ！行くか！」

・・・ヴァイスの掛け声で席を立ちあがり
ヴェナージとヴァイスはヘリポートへ、グリフィスは指令室へと向かった
＊＊＊

『ヴェナージ君、ガジェットの後続部隊が接近中や！迎撃に行ってくれるか？』

・・・はやてがガジェットの後続部隊が接近してる為ヴェナージに出動要請をする
その出動要請にヴェナージは・・・

「えぇ～…《そ、そんなに嫌がらんでも…》だって…ねぇ」

・・・あからさまに嫌そうな顔をする
そして不貞腐れた顔のままヴェナージは・・・

「代わりにフェイト隊長に行ってもらいましょうよ♪それが良いですよ《給料減らすで？》麗しき我が主よ、この下僕めになんなりとお申し付け下さいまし」

・・・自身の代わりにフェイトに行ってもらおうと提案
ヴェナージの提案に呆れたはやては、給料カットをチラつかせると彼は…モニター越しのはやてに向かい跪き目をキリッと輝かせ先程とは真逆の返答をする
そんなヴェナージにヴァイスとはやての2人は間の抜けた表情で目が点になる

『はぁ…取り敢えず、後続ガジェット部隊の殲滅よろしくな』

「お任せあれ、麗しき我が主。ヴァイス！《お、おう！》では、行ってきます」

ヴェナージは煙草を携帯灰皿で消した後、ヴァイスがヘリのハッチを開ける

その後ＢＪに身を包みヴェナージは・・・

「!…ライトニング０５、ヴェナージ・モルドレイト・・・・出るッ！」

・・・ヘリから飛び出した

そして大空を舞うように目標に向かっていった・・・・・・・・・・・・・。

story. 8（後書き）

桃子「グリフィス君が出てくるとは・・・以外ね、アレ？そう言えば彼って本編じゃあ・・確かフェイトちゃんと通信してなかった？」

珀狼「そうですね、ですが此処での彼はヴェナージとヴァイスと一緒に雑談してるという事になってます（＾＾）彼は、ヴェナージの友人としてヴァイス程ではありませんが偶には話に出てきます、主に雑談の時だけですが（笑）あ…因みに、あの時フェイト通信してたのはルキノさんです（＾＾）」

桃子「ぐ、グリフィス君に出番。ですって…？（。д。）…！？」

珀狼「な、何もそこまで驚かなくても良いと思いますけど…（；・∀・）」

桃子「おっほん！気を取り直して…次回は？」

珀狼「この続き、ヴェナージのガジェットとの初戦闘を書きます♪」

桃子「そう、それじゃあ頑張りなさい」

桃子「物語の感想等待ってるわ～♪」

story. 9

・？？？？・・？？？？

『ドクター…。後、数分で後続のガジェットが目標と接触します』

研究施設的な建物の中でガジェットの位置をある男に報告する女性女性が報告してるある男とは…広域指名手配の次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ
彼は、今回の戦闘で何か得るものが有るんじゃないかと予感しガジェットの増援を彼の秘書代わりの女性ウーノに指示した

「ありがとう、ウーノ…。さて私の予感は吉と出るかな？」

『なっ！？《どうしたんだい？ウーノ》ガジェットが何者かの攻撃を受けました』

ジェイルは自身の予見の出方を考えていた時・・・。
その矢先、ウーノがガジェットが何者かに撃墜された

「ふぅん…（当たりか…それとも…）」

『今、映像を映します』

ジェイルはモニターに注目した
そこには赤き閃光がガジェットの横を過ぎ去る光景が映されていた
＊＊＊

魔力サーベルでガジェットを次々に撃墜していくヴェナージ
この様子・・・見方によってはカッコイイかもしれない…だが・・・

「（早く帰って煙草が吸いたい・・後、ヴァイスから借りた”あのゲーム”の続きをしなきゃなマジで続きが気になる・・・あ、そう言えばグリフィスが貸せと言っ…まぁいいか、アイツにはルキノが居るしなッ！）」

・・・考えてる事はあまりカッコ良くなかった
その前に、彼には問題発言では？と思うがまあ、ひとまずそれは置いといて・・・。
ヴェナージの元にガジェットが複数向かってくる

『Ｍａｓｔｅｒ．』「分かっている・・・マルチプラズマブレード……」

向かってくるガジェットに対しヴェナージは無数の剣型の魔力光弾を体の周囲に生成
その後、一旦足を止め・・・

「突き刺せッ！」『ｓｔｉｎｇ．』

・・・合図を出し無数の剣型の魔力光弾をガジェットに向け発射する
発射された魔力光弾は一斉にガジェットに向って行き次々に撃墜していくが・・・

「…へぇ（実物は少しは違うと言う事か・・・）」『Ｂｌｉｔｚ Ａｃｔｉｏｎ．』

・・・数機のガジェットが魔力光弾を抜けて来た

ヴェナージはもう1つの魔力サーベルを起動し両手に2刀の魔力サーベルを構え
高速移動魔法を使い、瞬間的に見失うほどのスピードでガジェット達の間を突っ切る

「…ふぅ、よっと」

ヴェナージが斬り付けながら通り過ぎた後にガジェット達が爆発するその後、姿を現したヴェナージは左手側の魔力サーベルを右側のサイドスカート上部に収めると次のガジェット達に向かって行く

「おっ・・・あのガジェット達で最後かな？」『Ｉｔ　ｓｅｅｍｓ．』「でも、念のため・・・」

ヴェナージの目がガジェット達を捉える、恐らく最後の編隊だと思われるが念の為に一応
探索魔法を発動してガジェット達が残っていないか調べる

『Ｎｏ　ｒｅｓｐｏｎｓｅ．』「よし・・・それじゃあ行きますか」

目先の目標が最後と確認したヴェナージは速度を上げてガジェット達に突っ込んで行く
そしてガジェットの横を通り過ぎる際、魔力サーベルでガジェットを斬り付け・・・

「せやッ！」

・・・まず1機目のガジェットを斬り捨てる
その後、ワンテンポ遅れて攻撃を感知したガジェット達がヴェナー

ジに向け誘導弾を発射する・・・ 無数に向かってくる誘導弾を切り払いつつガジェットに向かって行き

「２機目ッ！」 『Ｍａｓｔｅｒ！』

２機目のガジェットを斬り捨てる・・・・と、その時・・１機のガジェットが背後から迫って来た
それに対しヴェナージは即座に「４１」を抜き取りガジェットに向け・・・

「ショット・・・ッ！」

・・・魔力弾を発射しガジェットを撃ち落とす
その後「４１」を仕舞いヴェナージは魔力サーベルを構え直しガジェット達に向かって行き
ガジェットの分隊を次々に破壊していく・・・・そして最後の１機に向かう途中で再びもう１つの魔力サーベルを瞬時に起動させ後、一気に間合い詰め・・・

「…終わりだ」

・・・２刀の魔力サーベルで最後のガジェットを素早く・・・・いや、高速で斬り付けガジェットをバラバラに散開させ・・・ バラバラになったガジェットは落下していきその途中で爆発した

「戻るか《ゴキゲンヨウ》！？」

その後、ヴェナージがヘリに戻ろうとした時、いきなり１機のガジェットが姿を現し…その上何とガジェットは音声を出して挨拶をしてきた・・・ そんな情報は無かった為にヴェナージは少し動揺する

が、直ぐに気持ちを切り替え魔力サーベルを構える

「…（変声機で声を変化させてるが・・・かなり特徴的な喋り方だな・・・）」

ヴェナージは魔力サーベルを構えたまま無言でガジェットを見ながら分析する

そうしているとガジェットは再び音声を出し始めた

『キョウハ・・・キミニ・・・チョットシタ・・・テイアンガアッテネ』

「提案？《ソウ♪》…何かな？その提案というのは・・・」

『キミ・・・ワタシノ・・・ナカマニナ・・・ラナイカ？』

「は？」

ガジェットはいきなりヴェナージに仲間になれと誘ってきた

あまりにも的外れなガジェットの勧誘に一瞬間の抜けた顔をするヴェナージだったが直ぐに顔を直し・・・

「僕を誘いたかったらまず、そのふざけた声を何とかして出直して来るんだね」

・・・そう言いながらガジェットをバラバラに斬り捨てた

そして今度は念入り周囲を調べて反応が無いのを確認するとヴェナージはその場を去りヘリに帰等して行った・・・・・その頃・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・スカリエッティの研究施設（ラボ）：内部

・・・スカリエッティの研究施設では・・・。
モニターに映ったなのは・フェイト等を眺めるジェイル

「う～ん・・・ 実に素晴らしい」

『ドクター。最後のガジェットが撃破されましたが、更に増援を送りますか？』

ウーノがジェイルにガジェットを増援するかを聞く
するとジェイルは少し考えた後に・・・

「いや、止めておこう・・・ レリックは惜しいが今回は思わぬ収穫があった事だしね」

『収穫…ですか？《うむ》それは一体何ですか？ドクター』

・・・と不気味な笑顔を浮かべながら答える
ウーノはジェイルの”思わぬ収穫”が気になりそれを聞いてみた
するとジェイルは不気味な笑顔のまま話し出す

「それは・・・ 彼だよ《彼？あの増援を迎撃した男ですか？》そうだよウーノ」

『あの男はそれ程の男なのですか？』

「ああ・・・ 彼の戦闘力は見た感じだが恐らくあのFの残滓やエース・オブエース並みもしくは同等の力を持ってるだろう・・ それに彼のあの目は《何ですか？》我々と同じく”道を外れた者の目”だよ。だから彼にも、我々の同士になってもらおうと思ってねそれでアプローチを掛けたのだけど・・・ 今回は振られてしまったね」

『そのご様子だとドクターは彼の事を諦めてませんね《ああ、勿論だとも》彼の事を調べましょうか？《頼むよ》了解しました・・・それでは』

ウーノは彼の事を調べる為にジェイルとの通信を切った
その後、ウーノとの通信を終えたジェイルは・・・

「…らしい・・・素晴らしい・・・素晴らしい・・・素晴らしいいいッ！！是非とも欲しいな・・・！彼は！
そうだ！彼を落とす為に色々と準備をしよう・・・これからとっても忙しくなりそうだ…フフフフハハハハハ！アハハハ！アハハハハ・・・・」

・・・モニターに映る1人の男を見ながら狂気の高笑いをする
彼の目の前のモニターに映るのはガジェットを斬り捨てるヴェナージの姿だった
＊＊＊

「さて・・・この後の選択だが・・・《ヴェナージ…》あれ…？」
ヴェナージは次の選択を選んでいると着けていた突如ヘッドホンが取れた
何かと思い左右を見た後に後ろを振り向くと・・・
「一体、何をしている？ヴェナージ」
・・・そこには阿修羅と化したシグナムが立っていた
その瞬間、一気に顔が青ざめるヴェナージ・・・そしてヴェナージは、恐る恐るシグナムに此処に居る理由を聞いてみた
「な、何故此処に…？ちゃ、ちゃんとドアに鍵を掛けたのだけどなぁ～…」
「…良い機会だから教えておこう・・・お前の部屋の鍵は”３つ”あるんだ《はぁ！？》お前は遅刻する事が偶にあるからな、お前が遅刻した時誰かが部屋に入りお前を起こしてやる必要があるだろう？《ま、まさか…》ご明察、その１つは私が所持している」
「ぷ、プライバシーの侵害だと《黙れ！》ひいっ！」
シグナムの気迫にビビるヴェナージ
幾ら鍵があるからといっても勝手に入るシグナムは少し考えものだが・・・既に立場は逆転
している為、ヴェナージは反撃が出来ない
「こうでもしないとお前は起きないだろうが！《あうっ・・》それになんだこの破廉恥なモノは何処で買った！というか、何故買えた！？言え！白状しろ！」

シグナムはヴェナージにキスが出来そうな距離まで迫る
通常ならとても良い状況なのだが…今に限って言えば「拷問」「脅迫」のどれかだろう

「し、知らないな～・・・・」

「あくまでしらを切る気か・・・ まあ良い夜は長いゆっくり聞かせてもらうぞ・・・ ヴェナージ」

あくまでしらを切るヴェナージにシグナムは笑顔で話しかける
その後ヴェナージはシグナムの”お話”より結局全て話してしまった・・・・・・・・・。

story. 9（後書き）

珀狼「何とか間に合いました（；´∀｀）」

桃子「そう、気になったんだけどヴェナージ君の部屋の鍵はヴェナージ君にシグナムさん後1人は一体誰なの？」

珀狼「フェイトさんですよ（＾＾）」

桃子「フェイトちゃん？」

珀狼「そうです。彼女は、ヴェナージの分隊の隊長ですからね・・・シグナムが不在の時にヴェナージが遅刻すれば彼女が起こしに行くのです（＾＾）まあ、ヴェナージが遅刻するのはかなり稀ですけどね」

桃子「ヴェナージ君は遅刻した場合どの位、寝てるの？」

珀狼「軽く・・・3、4時間は寝てます。前の部隊では6時間の遅刻をして減給を受けています当然ですが前の部隊が一緒のシグナムはそれを知っています。それをはやてに話してヴェナージの遅刻対策として鍵を3つ作ったのです（＾＾）」

桃子「ふ、ふ～んそうなんだ・・・さて次回はどんな感じになるの？」

珀狼「次回は、ヴェナージの怖い部分を出そうと思います・・・上手く出せるか不安ですが頑張ります（＾＾）」

桃子「じゃあ今回はこの辺で！」

珀狼「また土曜日にお会いしましょう（＾＾）」

桃子「物語の感想等待ってるわ～♪」

story. 10 （前編）（前書き）

土曜に更新できなかったので急遽、更新しました　珀狼

story. 10 （前編）

機動六課：ロビー

「遅い・・・一体、何してんだか・・・」

今日はヴェナージの久しぶりの休暇
彼は1人で街を歩き回りお宝の発掘をしようと思っていた
しかし、彼の休暇はある人物によって無くなった・・・その人物とは・・・

「ま、待たせたな」

・・・同じライトニング分隊の副隊長で彼のお目付け役のシグナム
彼女は何時もとは違ってかなり気合いの入った服
だが、そういうのに疎いヴェナージには余り効果が無いようで・・・

「全くだ・・・大体、女ってのはどうしてこうも時間が掛かるんだよ」

「う、うるさいッ！女性の身だしなみには時間が掛かるものなんだ！」

・・・服の事は触れずに時間を注意された
少しは気に掛けて欲しかったシグナムは強い口調で言い返す

「へいへい・・・僕が悪うございました。これで良いか？」

「ま、まあいいだろう」

シグナムの強い言い返しにヴェナージは以外と素直に謝った
以外に素直にヴェナージが謝ったのでシグナムも怒りを収める

「それじゃあ・・さっさと行こうか」

「ああ、そうだな／／／」

その後、シグナムとヴェナージはロビーを後に六課の駐車場に向かった
そして駐車場に着くとヴェナージがゴーグル付きのヘルメットを被り先にバイクに乗りバイクのエンジンを掛ける・・その後シグナムがバイクの後ろに乗る

「準備は良いか？《ああ》それじゃあ行くぞ」

そしてヴェナージとシグナムはバイクに2人乗りしながら駐車場を後にした
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
・六課隊舎前

2人が街に繰り出そうとバイクで隊舎前を通りかかった
その時、訓練を終えた新人達となのは達が見えヴェナージはバイクを止めて・・・

「エリオちゃん♪今日の訓練はもう終わりなの？」

・・・エリオをからかいながら質問をする
するとエリオは恥しいのか顔を赤くさせて言い返す

「ちゃんは止めて下さいよ！／／／」

「いいじゃないの♪《あの、モルドレイト副隊長》ん？何かな？ランスター陸士」

ヴェナージがエリオをからかいながら話していると以外にもティアナがヴェナージに話しかけて来た

「このバイク・・・副隊長のですか？《そうだよ♪》随分と速そうな型ですね」

ティアナはヴェナージ達が乗ってるバイクに興味があるようで質問をしてきた

そんなティアナの質問に対し・・・

「へぇ～これが分かるとは中々だねぇ《どうも》」

・・・ヴェナージはティアナに少し感心した

見た目からして彼の乗っているバイクはレーシングタイプのバイク

速度や機能等考えたら自動的にこうなったらしい

それからヴェナージとティアナはバイクの話で盛り上がってると・・・

「あのぅ・・・ヴェナージ君《何ですか？》シグナムさんと・・・デートなの？」

・・・なのはが状況から見てヴェナージにデートなのかと質問をするとヴェナージは1度ため息をした後・・・

「そんな訳無いですよ・・・彼女は僕の監視ですよ《監視？》え

え、昨日ちょっとした事がありましてね・・ それで監視をしてると言う訳です」

・・・と遠い目をしながら答えた

ヴェナージの遠い目に一同がそれぞれ困惑の表情をしていると・・・

「ヴェナージ・・・ そろそろ行かないと遅くならないか？」

「ああ、そうだな・・ さてそれじゃあ行こうか」

・・・待つのに疲れたのかシグナムがヴェナージに急ぐように言う

その後、ヴェナージは・・・

「エリオちゃんにみんな、それじゃあな」

「えりおちゃんは止めてくださいよ！」

「エロ本の表紙で《ちょ！？ちょっと！？／／／》鼻血を出す内はちゃん付けで十分さ！Ａ！ＡＨＡＨＡＨ

「もがふもふがふまおおおおおお！！」

・・・目隠し＋口をタオルで覆わされ、更に半裸で亀甲縛りの上に石抱きをさせられるヴァイスが六課の食堂前に居た
彼のこの変態的姿の訳は、ヴェナージに色々と悪い事を吹き込んだ結果・・・。
こうなってしまった・・・そんな変態的姿の前にはやてとリインが通りかかった

「はやてちゃん・・・あれ《リイン》はいぃ？」

「私らは何も見なかったええな？《でも》ほらプラカードにも書いてあるやろ？」

はやての言うとおり確かにヴァイスの首にプラカードが掛けられている
そのプラカードに書かれてる文字は・・・

『新しい世界に目覚めました♪話しかけないで下さい♪ヴァイス』

・・・と変態丸だしの文面・・・因みにこれはヴェナージ渾身の一筆！
これには流石のはやてもドン引きした
その後、リインと一緒に何も見なかった事にしてこの場を静かに去った
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
・ミッドチルダ：アンティークショップ

ヴェナージとシグナムは街に来ると何となくアンティークショップに立ち寄った

そこでヴェナージはある物を見つけた…それは・・・

「良いデザインの懐中時計だね買おうかな」

・・・凝った花の装飾が施された2つのハンターケース型(タイプ)の懐中時計その懐中時計を手に取って凝視するヴェナージ

「時計？お前の趣味か？《まあね》そうか」

そんな時別の場所で商品を見物していたシグナムがこちらに来てヴェナージの持つ懐中時計を一緒に見ながら彼に趣味なのかと聞くするとヴェナージは2つの懐中時計を手に会計へ向かう

「──になります《ん・・》丁度ですね、ありがとうございました」

会計を済ませたヴェナージはシグナムと一緒に店を出るその後、近くの公園に行くと先程、購入した2つの懐中時計を取り出し・・・

「ほら《何だ？》どれか好きな方をあげるよ僕は1つで十分だから」

「えっと・・・本当に良いのか？《要らないなら、フェイトさんにでも》こ、こっちだ」

・・・シグナムに1つあげると言うヴェナージ

突然の事に戸惑うシグナムだったが、彼がフェイトの名を口にした瞬間

咄嗟に片方の懐中時計を手に掴み取る

「綺麗だな・・・《そっか♪》ありがとう」

そして手に掴み取った懐中時計を見てそう呟く
シグナムの懐中時計にはカーネーションとチューリップの装飾が施され
ヴェナージの懐中時計にはカーネーションと彼岸花の装飾が施されている
その後、シグナムが貰った懐中時計を見ていると・・・

『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ』

・・・スレイヴが六課からの緊急通信を表示した
ヴェナージは少し疑問を抱きながら通信を開く

「緊急通信？はい、こちらヴェナージ・モルドレイト」

『あ、私やヴェナージ君、今直ぐ六課に帰って来てくれるか？』

「緊急通信を使う程の自体なのですか？《うん》分かりました、今直ぐ帰等します」

『それじゃあ・・・六課に帰って来たら・・・そのまま直接に部隊長室まで来てくれるか？《了解です》それじゃあまた後でな』

はやてとの通信を終えるとヴェナージはシグナムを再びバイクの後ろに乗せ
機動六課に急いで戻って行った
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課：部隊長室

ヴェナージは六課に戻ると先程言われた通り部隊長室に来た
そこでは既に、はやて・なのは・フェイトの３人が座っていた・・・
はやてはヴェナージが来たと同時に話を切り出す

「ヴェナージ君、レジアス・ゲイズ中将から緊急メッセージが来たんやけど・・・ 中将とヴェナージ君の関係について聞かせてくれるか？」

「なら、見れば早いでしょう中将に繋いで下い」

はやてはヴェナージの事をレジアスの送ったスパイかと思い厳しい目で質問する
そんな・・・ はやてにヴェナージは見た方が早いと言ってレジアスに通信を繋ぐようにお願いをする・・ はやてもその方が早いと思ったのかレジアスに通信を繋ぐ

『…久しぶりだな、モルドレイト』

繋がれた通信画面にレジアスが現れ親しげに話そうとするが・・・。
そんなレジアスに対してヴェナージは・・・

「用件を」

『うむ、実は先程・・・ 極秘裏に造船していた戦艦と空母がテロリストに強奪されてた』

レジアスの口からテロリストによるとんでもない犯行が言われる
それに驚いたのはヴェナージでは無く、はやて達の方だった

『そこでお前には強奪された戦艦と空母を撃破に行って欲し《断る》なっ！？』

「そんなモノ”お前”の狗にでもやらせろよ、どうしても僕にさせたいのなら・・・まずは金と”殺傷許可”を出しなよ・・・そうすれば考えてあげるけど・・・・どうする？」

レジアスが言い終わる前にヴェナージはそれを遮って自分の要求をレジアスに言う

極上の頬笑みを浮かべているヴェナージだが・・・。

その瞳は・・・・獲物を狙う野獣の目と凍える様な冷たい瞳が合わさった何とも言えない

瞳をしていた・・・この瞳を見た一同の周囲の空気が凍る

「さてお金ですけど・・・――――にしましょう♪・・・こちらはお前の尻ぬぐいをさせられるのだからこれ以上は値引きは絶対にしないよ？…それが嫌なら早々に失せろ」

ヴェナージの提示した金額はヘリや戦車が一括で買えるレベルのモノ流石のレジアスも少し考え出したが・・・

『…分かった。料金は貴様の口座に振り込んでおいてやる・・・・それと”殺傷許可”も私が許可しよう、だが許可する限りは失敗は許さんぞ』

「はい、は～い♪」

・・・ヴェナージの戦歴を考慮し彼の提案を受け入れた

その後通信を終えたヴェナージは、なのは達に自分とレジアスとの

大まかな関係を話した後・・・ 出撃準備に取り掛かった・・・・・・・・・・・・。

レジアス・ゲイズ

事実上の地上本部総司令
裏ではヴェナージに驚く程に高額な報酬と引き換えに表に出せない様な犯罪等の処理等をさせている模様
次元航行部隊や聖王教会等の事を嫌っているレジアスだが、自身が命じた色々な犯罪等の処理の実績があるヴェナージの事はそれなりに信用しており
彼を地上本部か自分の部下に引き入れようとしている

だが、ヴェナージはレジアスの事を唯の金づる程度の人物としか思っておらず
人としての信頼は”皆無”な上、嫌いなタイプの人間なのでヴェナージはレジアスの事は目上の人物なのに”お前”呼ばわりしている

因みに、レジアス貰った報酬はほぼ全てが彼の復習対象の情報を情報屋から買う為に消費している為に手元には微々たる金額しか無い

story. 10 （前編）（後書き）

桃子「怖い部分はどうしたの？」

珀狼「大分更新が遅れたので、カット部分を入れた結果・・・戦闘での怖い部分が後回しになってしまいました。m（__）m」

桃子「本末転倒ね、じゃあ次回はこの続きなの？」

珀狼「はい♪次は急な用事が無ければ土曜に更新できると思います」

桃子「そう、まあ頑張りなさい」

珀狼「はい！」

桃子「物語の感想等待ってるわ～♪」

ｓｔｏｒｙ．１０　（後編）

・機動六課：ヘリポート

ヴェナージは出撃準備をしてヘリポートで待機していた
その訳は、目標の戦艦及び空母の位置がかなり離れた場所にあった
この戦艦等を一刻も早くこれを何とかしたいレジアスはヴェナージに対して数機ほど開発していた防衛用の魔導師支援ユニット”ガルーダ”を１機貸した
ヴェナージがヘリポートで待機して数十分位過ぎた時、ガルーダが到着した

「へぇ・・・あれが”ガルーダ”か・・・・デカイな」

ヴェナージは六課のヘリをも優に超えるガルーダの大きさに少し驚く
そしてヴェナージは着いたガルーダを装着し起動を始める

「…各部チェック開始・・・全対艦追尾魔力弾、各部魔力ガトリング、中距離魔力砲、高魔力長射程砲、魔力対艦ソード、Ｂフィールド、オールグリーン・・・システム起動」

『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

チェックが終了し起動した事をガルーダが音声でヴェナージに知らせる
その後、ガルーダを装着したヴェナージは・・・

「──…発進」　『Ｔａｋｅ－ｏｆｆ』

・・・目標の戦艦及び空母に向けて高速で向かって行った
＊＊＊

『Ｍａｓｔｅｒ．』

「砲撃の返事とは…とても分かりやすい返事だな～っと」

警告の返事が来る前に戦艦の砲撃が向かって来た

その向かって来る砲撃に対してヴェナージは両腕に装着しているアームの先端の中央にある大口径の長距離砲の砲門を戦艦の砲撃に向けると・・・

「ターゲットロック…発射ッ！」

・・・防御の為、砲撃に向けてガルーダの長距離砲を発射した

しかし放たれた砲撃は、戦艦の砲撃を防ぐどころでは無く戦艦の砲撃を飲み込みそのまま戦艦の戦艦の主砲に当たり戦艦に大きなダメージを与える

「ターゲット、マルチロック…――全魔力弾、発射」

戦艦に大きなダメージを与えたヴェナージは追撃をする為ガルーダに装備されてる

全対艦追尾魔力弾の砲門を開く…その数２２０

２２０発もの対艦用の魔力弾の雨が一気に激しく戦艦に降り注いでいく、それが命中した戦艦は黒い煙と炎を上げる…最早、沈むのは時間の問題だろう

それを察したのか生き残ったテロリストが脱出艇を用意してる姿が見える

「――逃がすか、全砲門解放……死ね、フルバースト！」

ヴェナージはまるでテロリストの脱出を許さないと言わんばかりに

ガルーダの全砲門を開きそれを一気に発射し脱出するテロリストを畳み掛ける

『ぎゃあああああ――…』　『う、うあああああ――…』　『た、たす――――…』

一斉発射の命中後、様々な悲鳴が一気に消えていった…。
その後ヴェナージはガルーダの一斉発射を3回もして戦艦に乗っていたテロリストを
文字通りに全滅・・・いや……消滅させた

「――生命反応0、戦艦は海に沈んだし次の空母も墜として早く帰ろっと♪」

生命反応が1つも無い事を確認すると次の空母に向かって行った
……
・アルトセイム地方沖：上空

「さぁ～て楽しい、楽しいゴミ掃除開始だ♪」

空母を視認したヴェナージは初撃に空母のアンテナと滑走路に向けて魔力弾を放ち
アンテナと滑走路を潰しついでに搭載機と武装を幾つか破壊した後、
空母の後方に回り込むと・・・

「――対艦ソード展開」　『Ｒｏｇｅｒ．』

・・・先程、長距離砲を発射した口径から対艦ソードを展開させてスクリューを破壊し動きを奪った後、上空に上がるともう1度、魔

力弾を放ち空母の武装を完全に潰した

「ガルーダ装着解除、解除後はロックし自動飛行モードに切り替え上空待機」

『Ｒｏｇｅｒ．』

ヴェナージはガルーダの装着を解除してスレイヴを展開して空母の甲板に降り立つ

そして…無言で中指を立てるとそれを2，3回曲げてテロリストを挑発する

暫らく経つと、挑発に乗ったテロリストが何百人と出てきた

『我らの野望を．．．！貴様──ッ！！』「まず1人…」

出て来たテロリストの1人が早速ヴェナージに向かって来た

ヴェナージはそれを涼しい顔をしながらテロリストの攻撃をかわした後、首を飛ばす

「さぁ～て悪党供、虐殺（おしおき）の時間だ．．．」

その後ヴェナージは、テロリストの集団を次々に切り刻み…甲板の上に死体の山と血の海を広げていく…。

『た、助け《…》がっ！？《フンッ…》あああああ──ッ！』

助けを求めるテロリストの両手足を斬り落とすヴェナージ

その後ヴェナージは右手でテロリストの頭を掴むと・・・

「お前達の様な屑を見ているとな．．．思い出すんだよ、だか

ら――――」

――――消え失せろ――――

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｃｒａｓｈ』

・・・その頭を持ち上げ宙づりの状態で頭に視認出来る程の強力な電撃を浴びせる

暫らくの間電撃を浴びせているとテロリストは・・・・ 黒焦げの死体に変わり果てた

「きたないゴミめ…」

ヴェナージは死体になったテロリストを落とすと・・・ 一応念の為に死体の首を凄まじい勢いで踏みつけ首の骨を砕く

見る限りでは、どうやらこの死体が最後の１人の様だ

その後ヴェナージが念入りに生き残りを探していると・・・ テロリストの１人が逃げようとしていたそれを見つけたヴェナージは・・・

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｒｕｓｈ』

『がっ！《逃げんなよ…》ひぃギャアアアアアアアア！』

・・・直ぐに向かって行きテロリストの腹部に剣を刺す

その次にテロリストの腹部に手を突っ込むヴェナージ

「痛いか？ま、そうだろうな、じゃあ《ヴァ、ヴァメテクレ》――…いやだ」

そう言うとヴェナージは内側から内臓を潰していく…。

その後、虫の息になったテロリストに内側から強力な電撃を使い止めを刺す
因みにコイツがこのテロ集団のトップ
彼はヴェナージの狂気の前に逃げようとしていたが…偶然見つかってしまった

「さて・・・・と、これで全員の筈だけど、今の様な事があるからな探すか」

そう言ってヴェナージは生き残りが居ないかを探しに向かった
この時のヴェナージの瞳は薄っすらと赤く点滅していたのだが・・・・
彼自身はその事に全く気付いて無かった
その後テロリストが居ない事を確認したヴェナージは、再びガルーダを装着した後に一斉発射を数回して空母に行い空母を消滅させた後、六課に帰還した
＊＊＊

「…護れなくてゴメンね、お姉ちゃん」

そう呟き暫らくの間”あの時”の事を思い出した

そしてヴェナージはその事を思い出しながら夜を更かしていった・・・・・・・・・・・・・。

ガルーダ

レジアス・ゲイズ中将が開発していた”防衛用”の魔導師支援ユニット

そのサイズは巨大で戦闘機を操縦しているように見える

武装は２２０発の対艦追尾魔力弾に魔力ガトリング６機、中距離魔力砲×２高魔力長射程砲×２魔力対艦ソード×２と豊富な上にＢフィールドも付いており攻守ともに優秀

その上、動力は莫大な容量で砲撃を撃ちながらでも２日も稼働出来る

実はこのガルーダは兵装の全てがポイニクセル王国の技術を盗用して作った兵器で実戦配備が出来ずに未だに試作兵器のまま、もしこの兵器を公に使ったら問題が起きかねない

因みにヴェナージが使用した後、レジアスに返却されたガルーダは問題防止の為に全機が廃棄された

---

story. 10 （後編）（後書き）

桃子「今回は2話編成の後編ね」

珀狼「そうですね（＾＾）」

桃子「確かに恐い部分は多々あるわね一応」

珀狼「はい」

桃子「で、次はどんなの？」

珀狼「桃子さん出番ですよ（＾＾）b」

桃子「あら♪じゃあ準備とかしないとね！って事で今回はこの辺で！」

珀狼「次も急な用事が無ければ土曜に更新します」

桃子「そう、まあ頑張りなさい」

珀狼「はい♪」

桃子「物語の感想等待ってるわ～♪」

story. 11

機動六課、隊舎：ヴェナージの自室

レジアスによる命令の数日後

ヴェナージは偶々の遅刻により未だベッドの中で寝ていた

「ｚｚｚ…」

「全く・・・幸せそうに寝おって……誰も見て…いないよな？」

シグナムはコソ泥の様に周囲を見渡すと・・・。

寝ているヴェナージに顔を近づけてキスをしようと試みるが・・・

「…や、やっぱりこ、これは流石にダメだな・・・／／／／」

「う～ん…ｚｚｚ…」

「～っ！／／／／／」

・・・あと数？のところで恥しくなり諦めてしまった

その後、顔を真っ赤にしたシグナムは本来ヴェナージを起こしに来たと目的も忘れて逃げるようにヴェナージの部屋を出ていった

……

シグナムが逃げるように部屋を出た数分後・・・

「ヴェナージ起きてる？　入るよ？」

次に来たのは最近ようやく自分の気持ちに気付いた恋する乙女のフ

エイト
眠るヴェナージの姿を見てフェイトは変態(ヴァイス)のある言葉を思い出した

『イヤイヤ、マジだって実際お前モテるだろう？』

「ヴェ、ヴェナージ…？ね、寝てるよね？」

フェイトはそう言ってヴェナージを軽く2，3回程揺する
爆睡中のヴェナージはこの程度ではまず起きないが・・・

「こ、こういう時はどうするんだっけ？えっと…鱚だっけ？違う！！《う～ん…ん…？》こういう時えっと！ええっと！その…何だっけ？」

「…知りませんよ」　「うひゃあ！／／／／」

・・・目の前で大きな声を出しつつ騒がれると流石のヴェナージも起きてしまった
起きたヴェナージは、目の前で謎の行動をしているフェイトの疑問に呆れ顔で答えてみるとその瞬間、急に起きたヴェナージに驚き尻もちをつきながら転ぶフェイト

「あいたたた～……／／／」　「（やっぱり黒か）」

尻もちをつきながら転ぶフェイトの両足の間からアレが見えたヴェナージ
しかし、エリオの件でフェイト＝恐ろしいという認識があるヴェナージはその事を言うか言わないかを悩みつつしっかりと見逃さない辺り彼らしいと言えばいいのか…？

「あ…。～っ！！／／／／／／／／」

ヴェナージの視線に顔を真っ赤にしながら気付き急いで立ち上がるフェイト
そして顔を真っ赤にしつつ若干、目に涙を溜め・・・

「み、見た…？《Ｙｅｓ！》うぅ～…／／／／」

・・・ヴェナージに見たかどうかを確認する
羞恥顔のフェイトの質問に何の躊躇いもなく”Ｙｅｓ”と即答するヴェナージ
ヴェナージの即答に少々、泣き顔になるフェイト

「ありがたや、ありがたや」

「お、拝まないでよおッ！／／／／」

泣き顔のフェイトを両手を合わせて拝むヴェナージ
拝むヴェナージに泣き顔まま両手を振りながら注意するフェイトだが…１つも恐くない

「で・・フェイトさんは態々、僕にその素晴らしいモノを見せ付ける為に僕の部屋に侵入したのですか？それはそれはどうもありがとうございます♪ありがたや、ありがたや」

「ち、違うよ！え、えっとね――――…」

再び両手を合わせて拝むヴェナージを注意したフェイトは此処に目的を伝え始めた
フェイトが此処に来た目的は２つあって１つはヴェナージを起こす

事、もう1つは・・・

「管理外世界への出張任務ですか？《うん》じゃあ僕は六課に残ります《え！？》」

・・・機動六課の管理外世界への出張任務の連絡だった
その連絡をした瞬間、直ぐにヴェナージは有給を使って行く事を拒否した
フェイトはいきなり行く事を拒否したヴェナージに驚き拒否した理由を聞いてみる

「ど、どうして行きたくないの？」

「だって面倒・・・ゴホン！フェイトさんや高町教導官、八神司令、シグナムにヴィータ副隊長それに新人達…人員はもう十分な筈でしょう？なので僕は休息をとりつつ六課で待機しています」

こう言ってるヴェナージだが、最初に本音をうっかりと零していたヴェナージの本音を聞き逃していなかったフェイトは・・・

「だからフェイトさんは――――――…んなっ！？バインド！？」

・・・ヴェナージをバインドで拘束した
急にフェイトにバインドをされ驚くヴェナージ

「良い訳せずに大人しく付いて来た方が良いよ？《はぁ～…》」

「じゃあ用意するのでバインドを解除した後、出ていって下さい《何で？》男の着替えが覗きたいんですか？良い趣味ですね♪」

「〜っ！ち、違うよ！／／／／／／／／は、早くしてね！／／／／／／」

ヴェナージの言葉にフェイトはバインドを解除すると再び顔を真っ赤にして慌てながら部屋を出いった．．．その後ヴェナージ荷物を纏めると皆が待つヘリポートに向かった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・管理外世界：第９７世界「地球」海鳴市

その後ヴェナージは、はやて達と一緒に次元ポートを抜け管理外世界についた

着いた管理外世界は第９７世界「地球」海鳴市。なのはとはやて達の故郷だ

「うおっ！？何だ？この猫の集団は！？」

地球に着いたヴェナージを出迎えたのは大きな屋敷と大量の猫の集団だった

猫の多さに驚くヴェナージだが、はやて達は全然驚いていない

「まさか…此処に化け猫が《違うッ！》って〜ないきなり殴るなよな」

とても失礼なヴェナージの発言にシグナムがツッコミを入れる

「わぁ〜にゃんこ達ゴメンなぁ」

「ネコちゃん！　お久しぶり」　「はやてちゃ〜ん！」

その後ヴェナージ達の元に優しそうな雰囲気の女性が近寄ってくるどうやら此処の屋敷の人間の様だ・・・その女性に仲良さげに話をするはやて達
女性はヴェナージの事に気付き、ヴェナージの元に近寄って来た

「初めまして私は”月村　すずか”と言います」

「どうも僕はヴェナージ・モルドレイトと言います」

そしてすずかとヴェナージはお互いに自己紹介をし、少しの間雑談をする
すずかとの雑談を終えたヴェナージは・・・

「部隊長《何んや？》部隊長は、すずかさんとの久々の再開を楽しみたいでしょうが僕がその場に居ても暇になだけですし僕は自由行動をしても構わないでしょうか？」

・・・はやてに自由行動の許可をもらおうと頼んでみる
ヴェナージの尤もな理由に・・・

「う～ん…別にええけど・・・でもヴェナージ君1人だけやと色んな意味で心配やし《…》見張りとしてシグナムと一緒に行動するなら自由行動でええよ♪」

・・・はやてはそう言って考え始める
何故、ヴェナージを1人にするのを悩むかというとシグナムからヴァイスからの借りたあのゲームの事を聞いていた為

「…まあシグナムが良いのなら、僕は別に構いませんよ」

「シグナムは、それでええか？《はい》じゃあヴェナージ君の見張り頼むな♪」

「お任せ下さい、我が主《行くぞ》ああ」

その後ヴェナージとシグナムは一緒に別行動を開始した
ヴェナージとシグナムが見えなくなるとすずかがはやてに話しかけて来た

「ねえ、はやてちゃん《ん？》どうして2人を一緒に行動させたの？」

「ふふっ♪訳アリや♪上手くいけばちゃんと報告するな♪」

「うふふっ♪うん、楽しみにしてるね♪」

すずかの質問にはやては”訳アリ”とだけ答える
その”訳アリ”を何となく理解したすずかは報告を楽しみにするのだった
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・海鳴市：道路

月村邸を後にしたヴェナージとシグナムは一緒に海鳴市内を散策していた
その途中ヴェナージはシグナムに・・・

「ねえ、シグナム《何だ？》何処かのんびり出来る喫茶店とか無いの？」

・・・のんびり出来そうな喫茶店が無いかと聞く
するとシグナムはうすら笑いをしながヴェナージにらこう答えた
「ふふっ…とっておきの店があるぞ《ならその店に行こう》”本当に良いのか？”」
「ん？別に構わないけど？《そうか・・・なら、案内しようこっちだ》」
そして2人はシグナムの案内で彼女の”とっておきの店”に向かって行った
ヴェナージは移動の最中ずっとシグナムうすら笑い訳を考えていた
……

・海鳴市：喫茶店前

「ヴェナージ着いたぞ、此処だ」
「この店の名前何て読むんだ？《翠屋（みどりや）だ》ふ～ん」
シグナムは案内して来たのは喫茶”翠屋”喫茶店兼洋菓子店の店
見た感じ別段おかしな箇所は1つも無くヴェナージは、シグナムの先程のうすら笑いの訳が分からず更に気になり始めたうすら笑いの理由が気になった
「じゃあ、折角来たんだし入るか《ああ》」
うすら笑いの理由が気になりつつもヴェナージは翠屋のドアを開ける
「いらしゃいませ～♪って、ヴェナージ君！？」

「……は？」　「くくっ…」

翠屋のドアを開けるとヴェナージを店員姿のなのはが出迎えた

その衝撃的な光景に珍しくヴェナージは目を点にさせた・・・・・・・・・・・・・・。

story. 11　（後書き）

桃子「色々言いたいけど…何で私が出て無いのよ！」

珀狼「出てるじゃないですか《何処で！》……裏で（ボソッ…）」

桃子「「（°ー ω・）『+』┤ー┣┫ ∞ ドギュ――《（　°∀°）・∵・　グハッ！！》ーーーーン」

珀狼「U(~ つ°Д°)つ　ピクピク」

桃子「全く、本編に出ないと意味無いでしょうが！……さて・・ 駄作者は置いて置くとして次も作者が急な用事が無ければ土曜に更新するそうよ」

桃子「物語の感想等待ってるわ～♪」

story. 12

・翠屋：店内

ヴェナージはシグナムに案内されて喫茶”翠屋”にやって来た
店内に入ったヴェナージを店員姿のなのはが出迎えた
そして店員姿のなのはにヴェナージはこう質問した

「あ、教導官は辞めて喫茶店の店員に転職ですか？《違うよ！》
何だ、違うのか…」

「何でそんなに残念そうな顔をするのかな！」

可愛らしい怒り顔でヴェナージを叱るなのは
冗談…？もそこそこにしてヴェナージはなのはが店員の姿をしてる
理由を聞いた

「それで？何故店員の姿をしてるんですか？あ、コスプレですか
？」

「違うよ！翠屋は私の実家なの！」

「な、何ぃ！？性質の悪い冗談はやめて下さいよ！《本当だよ！
》嘘だッ！！！」

なのははこの喫茶翠屋が実家だと言うがヴェナージは全くその事を
信じようとしない
その理由は、なのはについての噂が関係している例えば・・・。

「え？じゃあ僕が聞いた高町教導官は武道家の娘で子供の頃から熊や牛等をサンドバック代わり殴り飛ばし信念は拳と力だ！っていうのは？」

「そんな訳無いよ！ふ！つ！う！の女の子だったよ！」

なのはは”普通”の部分を強調しながら否定する
想像を否定されたヴェナージは声も出せない程に驚く
因みにこの噂の元々は「高町教導官の実家には道場がある」だけだったのだが、この言葉に色々な尾ひれが付き程良く悪改され広まっていった
未だに驚き声を出さないヴェナージに店のマスターらしき人が話しかけて来た

「君《…あ、はい》少し尋ねるが君はなのはの彼《違います》」

「そ、即答…」

ヴェナージは店のマスター…言い方からして恐らくはなのはの父親だろう・・・その父親が言い終わる前に否定し話を斬り捨てた
ヴェナージの即答になのはは落ち込んだ表情を見せる
そんな彼女を見かねたのかなのはの父がヴェナージに質問を続けてきた

「素早い返答だけどその訳・・・もし良ければ聞かせてくれるないかな？」

なのはの父のはヴェナージを真っ直ぐに見据える
その視線にヴェナージは肩を竦め一瞬仕方ないといった表情をさせた後に話し出した

「彼女と僕を例えるなら・・・そうですね～…”水と油”といったところでしょうか」

「水と油？《ええ》それはどうしてだい？」

「簡単ですよ、僕と彼女の相性は最悪に悪いという事です”今の彼女”と僕が付き合う事など万に1つもありませんよ・・・まあ彼女が今の性格を変えれば付き合うという可能性はあるでしょうが・・・どう見ても彼女はそんな事出来る人では無さそうなのでご安心を♪」

ヴェナージはなのはと自分が付き合う事は無いとそう言って説明するそのヴェナージの説明を静かに聞くなのはとその父

「さて・・・僕が此処に居ても此処の雰囲気が悪くなるだけだろうし僕は失礼しますよ」

そう言って席を立つヴェナージ
それに続きシグナムも席を立とうとするが、ヴェナージに

「お前は此処に居ろ」

と、そう言われてしまった
理由を聞こうとしたシグナムだが”それ以上喋るな”と言わんばかりの目をヴェナージがした為にシグナムはそれ以上追求する事が出来なかった
その後ヴェナージは1人で翠屋を後にした

「ただ私…ヴェナージ君と仲良くしたいのに…どうすれば良いのかな」

ヴェナージが居なくなった後になのはがそう呟く
なのはの言葉に沈む雰囲気…そんな中、シグナムは冷たくこう言った
「残念だが・・・ 今のなのはにはどうする事も出来ない《…っ！》」
なのはの心にシグナムの言葉が突き刺さりショックを受ける
その後、話を静かに聞いていたなのはの母、桃子がシグナムに理由を聞いた
「どうしてそう思うの？シグナムさん」
「詳しくは言えませんが、彼の過去に原因があると思います・・・仲良くしたいなら時間をかけていくしかないでしょう《え…？》」
シグナムの時間をかけていくしかないという言葉に反応するなのはそしてなのははシグナムに仲良くなれるのかと聞く
「私ってヴェナージ君と仲良くなれるんですか？」
「さぁ？《やっぱり…》未来の事など私が分かる訳無いだろう？まあ、可能性は十分にあると私は思うがな《え…？》」
「だ、だって私・・・ ヴェナージ君に嫌いって言われた事もあるし…」
なのははシグナムの意見が信じられないのか言い返す
シグナムはなのはの言い返しに少し呆れ顔になりながらこう言った

「アイツは本当に嫌いな奴に対してはどんな大声で話しかけられても完全に無視するから直ぐに分かる、なのは対してアイツは無視してないだろう？《あ…》それになのはがあんなにしつこくしても手が出て無いだろ？アイツは嫌いな奴がしつこくくれば男に女関係無く遠慮無く殴るか斬りかかるぞ？それが無いという事は嫌いでは無いという事だどうだ分かったか？」

「は、はい！」

「そうか良かったな…（ヴェナージの奴…この為に私を残したな、この借りはキッチリと返してもらうかならな）」

ヴェナージに嫌われて無いと知り喜ぶなのは
そしてシグナムはそんななのはを見ながらヴェナージへの借りをどう返してもらおうかと

考えるのだった
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・海鳴市：道路

翠屋を後にしたヴェナージは暇潰しも兼ねて道路を歩いていた
そして歩いている最中・・・ふとこう思った

「煙草が吸いたい…《イテッ》あ、スミマセン」

そう思いながら歩いていると見知らぬ男に肩がぶつかった
ヴェナージは男に謝った後、また歩き始めようとしたが・・・

「てめぇ、慰謝料払えやコラッ！」

・・・男はヴェナージの胸倉を掴みそう言って来た
そんな男にヴェナージは・・・

「イヤ《何だと！？》お金無いし～」　「この！クソ野郎！」

・・・そう言って男の要求を拒否する
男はそう言ってヴェナージに向かって拳を振り上げた

…数分後……。

「も、もう勘弁しふぇ下さい」

男はヴェナージにＯＨＡＮＡＳＨＩをされ男とヴェナージは立場を
完全に入れ変えた
ボロ雑巾の様な男の胸倉を掴んだヴェナージは・・・

「僕は今、煙草が物凄く欲しいんだけどな～♪」

「今直ぐ買ってきます！」

・・・男に煙草が欲しいとお願いをしてみた
親切な男はお金の無いヴェナージの為に煙草を買いに向かってくれた
そして数分後、男は数十種類もの煙草を買って来た

「これで勘弁して下さい！」

「次からは気を付けないとダメだよ《はい！スミマセンでした！
》じゃあね～♪」

ヴェナージは厚意に甘え男の買って来た煙草を全て貰うと男に注意しその場を去った
そして暫らくの間歩いているとヴェナージは公園を見付けた

「お！このベンチ灰皿付いてるラッキー♪これはもう吸うしかないよね～♪」

そして中に入ると灰皿付きのベンチを発見！
早速、先程厚意で貰った煙草を開けて吸い始めた

「ハァ～…生き返る～♪にしても平和だねぇ～…」

ヴェナージの視界には緑色の髪をした大人の女性が2人の子供がボールで遊んでる様子を頬笑みつつ見守る姿が映った…後、ついでに酔潰れて寝てるおっさん
暫らくの間、煙草を吸いつつその様子を見ていたところ子供が誤って寝てるおっさんにボールをぶつけた．．．ボールをぶつけられたおっさんは激怒し始めた
緑色の髪をした女性が直ぐにおっさんに謝るがおっさんの怒りは収まらない
その様子を静観していたヴェナージだったが急に立ち上がると女性とおっさん達の方に向かって行った

「すみません！すみません！」

「うるせえ！このぉ……うがあぁああ！？《お前が煩い》だ、誰だてめえは！」

「誰でも良いでしょ．．．それよりそろそろ許してあげなよ《痛

たたた！》」

おっさんが女性を殴ろうとしたその時ヴェナージはおっさんの拳を止め

その後、自分の手に魔力付与をしおっさんの拳を物凄い力で握る

おっさんはあまりの痛さのあまり悲鳴を上げる

「で？許すの許さないの？《ゆ、許す！許す！許す！！》そう♪」

ヴェナージがおっさんに許すかどうかを物凄い力で拳を握りながら尋ねる

おっさんは許すと言った為にヴェナージはおっさんの拳を放す

「覚えてやがれ！」　「無理」

拳を放すとおっさんは捨て台詞を吐き逃げるようにその場を立ち去った

おっさんが立ち去った後、女性がヴェナージに話しかけてきた

「あの～《何でしょう？》ありがとうございました」

「いえ、別に大した事はしてませんよ」

「ほら、あなた達もお礼を言いなさい」　「「ありがとお兄ちゃん」」

「次は気を付けろよ？《《うん！》》なら良いよ」

女性と2人の子供達がヴェナージにお礼を言う

その後、その女性と雑談をしていると・・・

「探したよ母さん《あら♪》…ってヴェナージ！？何で？」

・・・1人の女性がヴェナージと話している緑色の髪をした女性に話しかける

その話しかけた女性は・・・

「おやおやフェイトさん数時間ぶりですね♪」

・・・ヴェナージが数時間ぶりに会った女性

同じ機動六課の分隊の隊長、フェイト・T・ハラオウンだった・・・

・・・・・・・・・・・・・。

story. 12（後書き）

桃子「ちょっと！何よ！コレ！」

珀狼「おや？どうしました？（？＿？）」

桃子「どうしました？じゃないわよ！どうして私の出番が一言なのよ！？」

珀狼「あれぇ～桃子さ～ん（・∀・）ニヤニヤ・・・私は確かに出番があるとは言ってましたが台詞が多いなんて一言も言ってませんよね？（・∀・）ニヤニヤ」

桃子「〇（＃゜Д゜）＝（　＃）≡〇≪Д゜）・∴・ホゲッ！？≫…」

珀狼「…ᑦ（ ~ つ゜Д゜）つ　ピクピク」

桃子「……さて・・次回も作者が急な用事が無ければ土曜に更新するそうよ」

桃子「物語の感想等待ってるわ～♪」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1892x/

金の閃光のもう一人の義兄Another外伝：Avenger story.

2011年12月24日09時47分発行